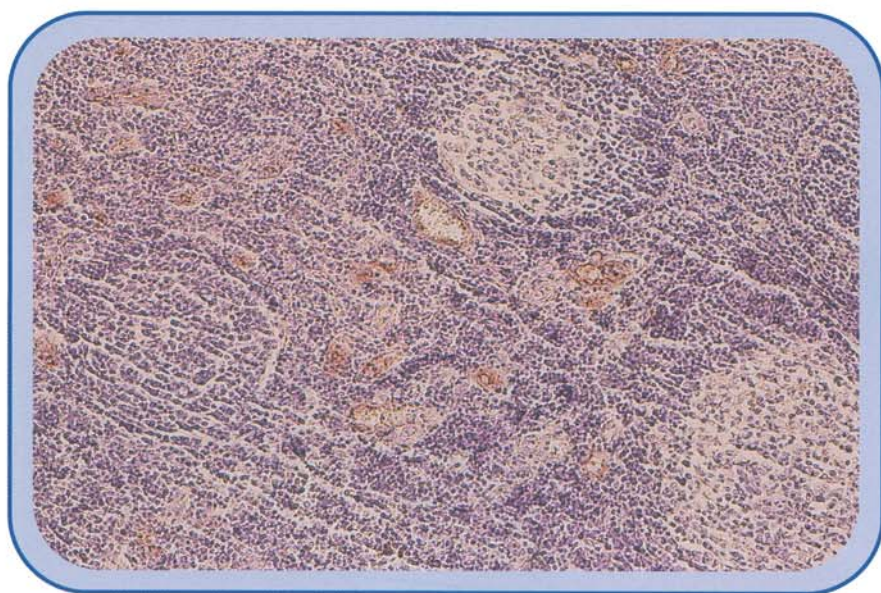


第14号

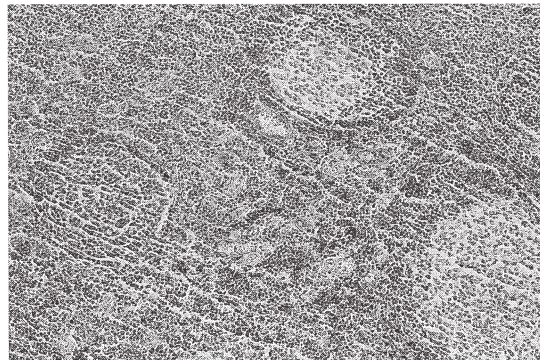
さくらじま

2000



鹿児島大学医学部 耳鼻咽喉科学教室
同門会誌

〔表紙写真の説明〕



皮膚へのリンパ球の homing (帰巢性) について

リンパ球側の homing receptor として cutaneous lymphocyte antigen (CLA) が接着因子として同定されている。掌蹠膿疱症症例の扁桃組織では、この CLA 陽性のリンパ球が多数出現し、本症の予後因子として注目されている。写真はその CLA 陽性細胞を示し、T 細胞領域に多く認められる。

目 次

| | |
|-------------------|----|
| I. 卷 頭 言 | 1 |
| II. 同 門 会 | 3 |
| III. 教室来訪者 | 5 |
| IV. 教室行事 | 6 |
| 1. 共催の講演会 | |
| 2. 桜島フォーラム | |
| V. 同門会報告 | 9 |
| VI. 地域医療報告 | 12 |
| 1. 巡回診療 | |
| 2. 身体障害者巡回相談 | |
| 3. 学校保健（統計報告） | |
| VII. 特殊外来通信 | 16 |
| 1. アレルギー外来 | |
| 2. 中耳炎外来 | |
| 3. 副鼻腔炎外来 | |
| 4. 頭頸部腫瘍外来 | |
| VIII. 病理集計 | 21 |
| IX. 各省庁諸研究 | 23 |
| X. 業 績 | 25 |
| 1. 原 著 | |
| 2. 著 書 | |

| | |
|---|----|
| 3. その他 | |
| 4. 国内学会発表 | |
| 5. 国際学会発表 | |
| 6. 学位論文要旨 | |
| XI. 医局通信 | 44 |
| 1. 新入医局員紹介 | |
| 2. 医局人事 | |
| 3. 学会報告 | |
| ①第17回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 | |
| ②第49回日本アレルギー学会 | |
| ③第6回マクロライド新作用研究会 | |
| 第12回日本口腔咽喉科学会 | |
| ④第100回日本耳鼻咽喉科学会総会 | |
| ⑤第61回耳鼻咽喉科臨床学会 | |
| ⑥第9回日本耳科学会総会 | |
| ⑦第38回日本鼻科学会総会 | |
| ⑧第9回日本頭頸部外科学会 | |
| ⑨第23回日本頭頸部腫瘍学会 | |
| ⑩ 4th INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON TONSILS AND ADENOIDS (第4回扁桃とアデノイドに関する国際シン ポジウム) | |
| 4. 関連病院便り | |
| XII. 関連病院住所と診療日案内 | 71 |
| XIII. 同門会及び教室員名簿 | 75 |
| 編集後記 | |

I. 巻 頭 言

黒 野 祐 一

Y2K問題もさしたる混乱を招くことなく新千年紀、ミレニアムを無事迎えることができました。とは言っても、国立大学は独立法人化に揺れ動き、それに伴い病院改革を迫られ、また介護保険の導入など先行きの見えない不安な問題が山積しています。さらに最近では、幼児殺害、監禁事件、果ては警察庁の不祥事などが続発し、我が国の将来を憂いている人々は少なくないでしょう。

「衣食足りて礼を知る」ということわざが正しいとすれば、モラルの低下あるいはこれを欠くことによって生じたともとれるこれら一連の事件は、昨今の長引く不況になにか通じるところがあるのではないかなどと考えてしまいます。確かに巷ではリストラという世紀末のキーワードがあちらこちらから聞こえ、大学新卒者の就職がなく、失業率はいっこうに下がる気配はありません。しかし一方では、多くの高校生そして中学生までもが携帯電話を持ち歩くほど豊かな文明社会となり、相変わらずブランド品が流行し、グルメブームはなおも止まることなく、とても衣食が不足しているとは思えません。現代ではむしろ「衣食足りて礼を忘る」と言うほうが当を得ているような気がします。

犯罪や事件につながるモラルの低下とまでいかななくても、昨今のマナーの悪さについても考えさせられることが度々あります。たとえば数カ月前、久しぶりにJRで長旅をした折のこと、リズムカルな列車の音と旅の疲れで心地よい眠りにつこうとしたその時、車内のどこかで携帯電話の呼び出し音が鳴り響き、それに続く大きな話し声に眠りを妨げられてしまいました。しばらくすると今度は、団体の旅行客が乗車してきて宴会を始めて大騒ぎ。車窓を楽しむような情緒ある旅はとうてい望めないこと、そして旅をするときはウォークマンが必携品であることを知らされました。

人間のパーソナリティーはシゾフレ型とメランコ型に分けられるようで、社会が豊かになるにつれて、他人との競争や情的な交流を避けて自分の世界を重要視するシゾフレ型の人々が増加していると言われます。昨今のパソコンやテレビゲームの普及は、まさにこれを実証する現象です。これに対してメランコ型とは、競争を好む一方で他人と深い情的な付き合いを望み人間関係や規則を重んじるタイプで、ワークホリック世代の人々がこれに適合します。パーソナリティーの善し悪しを論じるつもりはありませんが、こ

うした時代の流れと背景が、時として自己中心的で周囲が見えない、モラルやマナーを欠いた人々の出現を許しているのかもしれませんが。

最近カルテの開示やインフォームドコンセントが叫ばれるようになったのも、われわれ医療従事者のモラルとマナーを欠いた言動によって患者さんの信頼を失いつつあることの現われともとれます。医師としてそして社会に生きるひとりの人間としてのモラルとマナーを、これからも常に自分に問うていきたいと思うこの頃です。

Ⅱ. 同 門 会

2000年を迎えて

理事 吉田重弘

平成12年1月8日。同門会総会が、鶴陵会館で開催されました。黒野教授が教室を主宰されて、3年目に入り、教室の基礎は、着々と固められています。同門会及び医師会会員の皆様の更なる、御支援をお願い致します。当日は、金沢医科大学友田教授の「バーチャルリアリティーの耳鼻咽喉科への応用」と題して、特別講演があり、今後耳鼻咽喉科医の目指す方向の一端を示され、心から感謝申しあげたいと思います。

さて、昨年度記憶に残った事柄の中から、幾つかをのべて、新年度の励みとしたいと存じます。

南九州合同地方部会，鶴陵会館，平成11年4月18日。

宮崎医科大学小宗教授，平成9年5月，鹿児島大学黒野教授，平成9年11月，熊本大学湯本教授，平成10年3月に就任されております。今回は，前記先生のオンパレードでありました。かつてI教授が，じょうくの中で，自分達の事を，晴姿3人男と申しておられました。今度新進気鋭で，顔貌からして，キャラクターのかなり違う教授が，ユニークな研究を展開されるものと，楽しみにしたいと思います。

同窓会総会，鶴陵会館，平成11年7月3日。

例年になく多い7教授の退官。鹿児島大学出身の大学教授が60名に達した。奨学金学生は，現在まで47名であり，順調に推移している。等の情報を得ました。

照鴨会（医専一期生会），宮崎市，平成11年10月10日。夫人も含めて約40名出席。

ここは，来年実施されるサミットの外相会議場に予定されているとの事であった。講演は鹿児島大学出身で，宮崎医科大学外科の瀬戸口教授にお願いしましたが，新しい角度からの話で，興味深いものでした。

野坂名誉教授卒寿の祝，熊本市，平成11年7月10日，約30名出席。

熊本大学出身者が殆んどでありましたが，鹿児島大学からも6名出席，特に黒野教授から，お祝いの電報と花束が届けられ，小田原市より出てこられた2期生の荒田医師が，その花束を，野坂先生に手渡され，非常に喜んでもらいました。先生は疲れのため，

途中で帰られたので奥様が最後まで務めて下さって、無事終了することが出来ました。

「学長の怒り」平成11年7月5日、東京新聞（夕）梅原猛氏掲載。

……昭和34年11月11日の会議で、「研究陣は長い間苦心惨憺して、この現実を実証した。それを何1つ手伝うこともせず、頭から否定するとは何事か」と怒髪天を衝いて、目の前にあった灰皿を、通産省の役人めがけて投げつけ、席を蹴って退席された。……あの温厚な物静かな鰐淵先生が、と改めて明治人の気骨を見る思いであった。（徳臣晴比古著「水俣病日記」より）。

孫弟子である私は、先生の気概を、今後の人生に生かす事が出来ればと思っております。

不知火海岸地域住民健康調査審査会。

昨年度は、鹿児島市で2回。黒野教授と御一緒しました。「真室かどうか」をモットーに、先輩達の心意気を、より所として、医学的判断を続けて行きたいと思っています。真に残念な事ですが、過去約20年間、開業医からの審査員として、一緒に苦労して来た、眼科の園田医師が、4月5日、突然の病気で倒れられ、現在まで入院中であり、寂しい思いをしています。

最近、キャリア官僚による不正事が、クローズアップされております。勿論原因追求は、厳正に行われなければと思います。

少し話は変わりますが、先日NHKのインタビューに対して、日本人への警告をのべている人がいました。（日本の地方大学出身で、アメリカの工科大学の教授に就任した人）。第1に常識を疑う。第2に人のまねをしない、第3に現場体験。でありました。我々も参考にする所が大いにあるようです。

Ⅲ. 教室来訪者（平成11年 1月～12月）

| | | |
|------|-------------|-------|
| 1 月 | 島根医科大学耳鼻咽喉科 | 川内 秀之 |
| 11 月 | 宮崎医科大学耳鼻咽喉科 | 小宗 静男 |
| 12 月 | 大阪大学耳鼻咽喉科 | 久保 武 |
| 12 月 | 島根医科大学耳鼻咽喉科 | 川内 秀之 |
| 12 月 | 熊本大学耳鼻咽喉科 | 湯本 英二 |

Ⅳ. 教室行事（平成11年1月～12月）

1. 共催の講演会

1. 第3回南九州上気道感染症臨床懇話会（1月10日）
特別講演：中耳炎とサイトカイン
黒野祐一先生（鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科教授）
2. 第81回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（1月29日）
特別講演：スギ花粉症の病態と治療
川内秀之先生（島根医科大学耳鼻咽喉科教授）
3. 第7回鹿児島アレルギー懇話会（2月4日）
講演Ⅰ：気管支喘息とロイコトリエン
濱崎雄平先生（佐賀医科大学小児科助教授）
講演Ⅱ：最近のアレルギー疾患の増加－原因と対策－
久保千春先生（九州大学医学部心療内科教授）
スポンサーセッション
：アレルギー性鼻炎の病態－特に神経系の関与について
今野昭義先生（千葉大学医学部耳鼻咽喉科教授）
4. 第82回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（3月19日）
特別講演：臨床医のための側頭骨解剖－特に人工内耳を中心に－
山藤 勇先生（米国ピッツバーグ大学医学部耳鼻咽喉科教授）
5. 第24回日耳鼻鹿児島県地方部会総会ならびに第84回学術講演会（6月20日）
特別講演：顎顔面多発骨折の取り扱い
湯本英二先生（熊本大学医学部耳鼻咽喉科教授）
6. 第85回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（7月8日）
特別講演：頭頸部癌治療の進歩と今後の課題
中島 格先生（久留米大学医学部耳鼻咽喉科教授）
7. 第87回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（10月7日）
特別講演：めまい診療のキーポイント
石川和夫先生（秋田大学医学部耳鼻咽喉科教授）
8. 第88回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会
第1回上気道アレルギー疾患を考える会（11月11日）

特別講演：スギ花粉症の疫学と治療

馬場廣太郎先生（獨協医科大学耳鼻咽喉科気管食道科学教授）

9. 第89回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（11月25日）

特別講演：扁桃の免疫防御能と感染症

原潤保明先生（旭川医科大学耳鼻咽喉科教授）

2. 第2回 「耳鼻咽喉科 桜島フォーラム」

昨年度から黒野教授の発案で始められた耳鼻咽喉科桜島フォーラムも第2回目を迎え、年末のお忙しい時期にもかかわらず多数の先生方にお集まりいただきました。当日は以下のようなプログラムで行われました。

第2回 「耳鼻咽喉科 桜島フォーラム」プログラム

平成11年12月9日(木)

19:00 ~ 20:30

鹿児島大学医学部 鶴陵会館中ホール

- I. 開会の挨拶 黒野祐一 教授
- II. 症例検討
- (Moderator; 黒野祐一教授)
1. 他科で診断が困難であったためまい症例 岩坪 哲治
 2. 頭蓋内進展を認める鼻副鼻腔癌の手術治療 宮之原利男
 3. 喉頭部分切除を行った2症例 出口 浩二
 4. 真珠腫性中耳炎に対する手術治療 河野もと子
- III. 話題提供 ~ 当教室の基礎・臨床研究の up to date ~
- (Moderator; 松根彰志講師)
1. マクロライドおよび抗アレルギー剤と NF- κ B 牛飼雅人
 2. 掌蹠膿疱症のメカニズム 黒野祐一教授

前半は、手術症例を中心とした臨床症例についてその治療法などについて様々なディスカッションが行われました。また後半は、当教室で現在行っている研究テーマについて御紹介致しました。本会は、日頃貴重な症例を御紹介いただいている実地医家の先生方と治療方針や医療のあり方などを討論することによってお互いの理解をさらに深めるとともに、教室に対する御意見を伺う貴重な場として、益々発展させていきたいと考えています。今後も多数の先生方の御参加をお待ちしています。

(文責：牛飼雅人)

V. 同門会報告

平成11年度 鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室 同門会

役員会

平成12年1月8日(土) 15時30分より

鹿児島大学医学部 鶴陵会館 2階 小会議室

司会, 進行 黒野祐一 会長

出席 黒野祐一, 吉田重弘, 勝田兼司, 昇 卓夫, 山本 誠, 大堀八洲一,
内菌明裕, 鶴丸耀久, 上村達郎, 花牟礼豊, 上野員義, 松根彰志

欠席 江川俊治, 大野政一, 貴島徳明, 嘉川須美二, 小幡悦朗

(以上 順不同)

会務報告

前回の同門会総会での承認に基づき, 今回より南九州上気道感染症臨床懇話会との
合同開催がはずれた。講演会は, 日耳鼻鹿児島県地方部会との合同とした。

ただし, 今後の開催方法は, 今回の形に縛られずに行うこととする。

また, 今後同門会会員の動向を総会で報告するようにする。

会計報告

監事の鶴丸耀久氏, 上村達郎氏の監査を受け, 問題なしとの報告を行った。

今後, 会計報告は, 総会開催前年の「1月1日より12月31日まで」を単位として報告することとする。

その他

本年も同門会誌「さくらじま」(14号)一同門会誌としては第2号一の発行の予定。
秋頃に, 同門会の役員会を開催し, 同門会活動についてもっとゆっくり議論できる
場を設ける方向で努力することとする。

同門会総会の開催を1月のHappy Mondayの週の土曜日とする。

ちなみに次回(平成13年)は, 1月8日がHappy Mondayのため, 1月13日
(土)に開催する。

総会

平成12年1月8日（土）16時10分より

鹿児島大学医学部 鶴陵会館 1階 大ホール

司会，進行 黒野祐一 会長。

故前山拓夫先生のご冥福を祈り黙祷を行った。

同門会役員会で確認された，会務報告，会計報告を幹事の松根彰志より行った。

会計報告内容については，監事の鶴丸耀久氏より監査結果問題なしの報告を行った。

会務報告，会計報告，監査結果は承認された。

総会終了後，出席者全員で記念撮影を行った。

同門会地方部会合同学術講演会

一般演題

座長 勝田兼司

| | |
|------------------------------|------|
| 当科における特発性喉頭肉芽腫の検討 | 福岩達哉 |
| 睡眠時無呼吸症候群に対する UPPP 術後経過の検討 | 岩元光明 |
| 甲状腺腫瘍における FNA の有用性 | 花田武浩 |
| 稀な経過をたどった喉頭結核の一例 | 牛飼雅人 |
| 当科におけるナビゲーション下内視鏡下鼻内副鼻腔手術の経験 | 松根彰志 |

特別講演

座長 黒野祐一

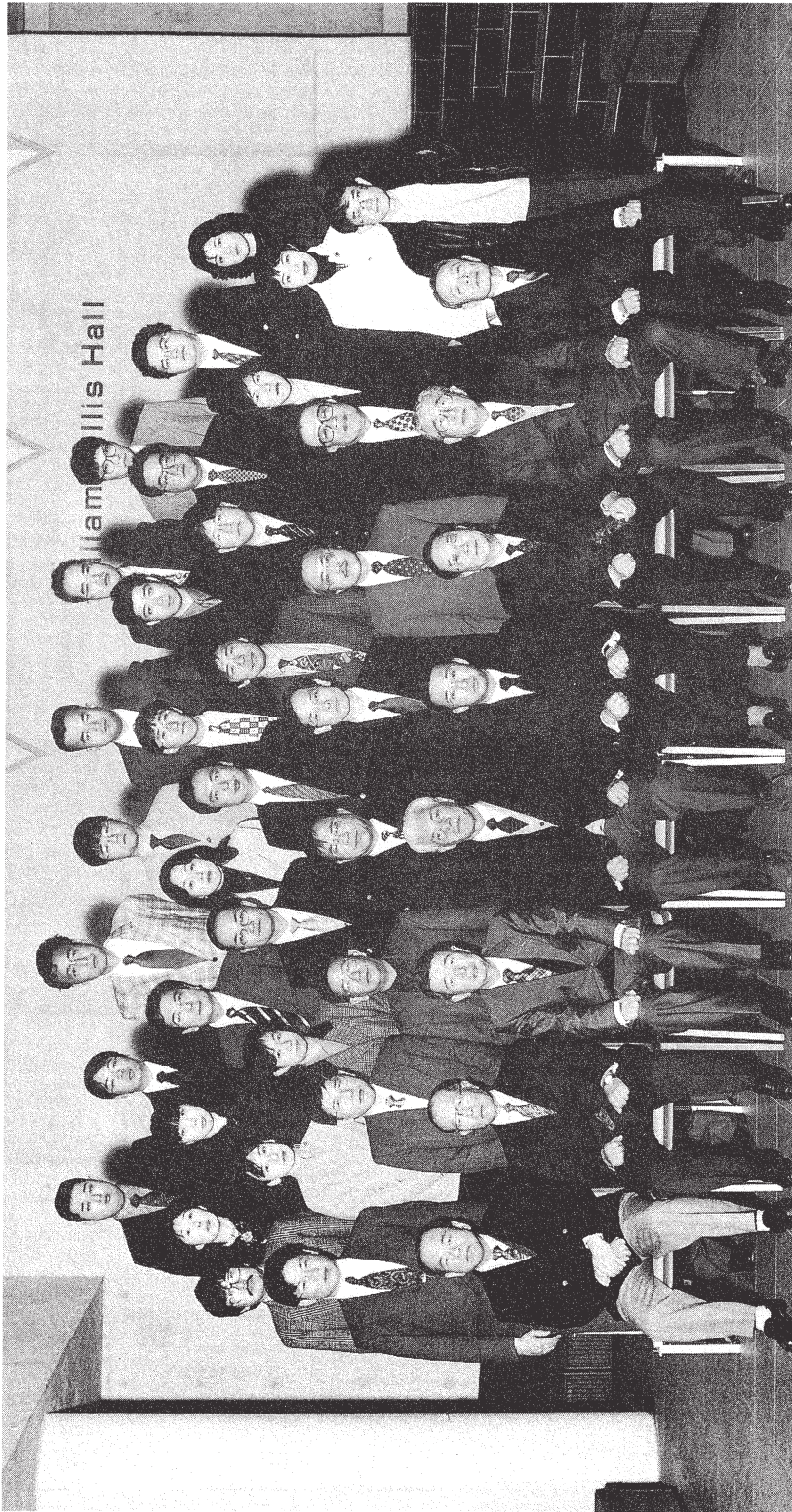
「バーチャルリアリティーの耳鼻咽喉科への応用」

金沢医科大学耳鼻咽喉科学教室 教授

友田幸一 先生

学術講演会終了後，鶴陵会館1階中ホールで新年会も兼ねた懇親会を開催した。

（文責：同門会役員会 幹事）
松根彰志



鹿兒島大学医学部耳鼻咽喉科学教室 同門会 総会
平成12年1月8日 於：鶴陵会館

Ⅵ. 地域医療報告

1. 巡回診療（県医務課）

下 甌 村（7月14日～7月16日）

十 島 村（9月7日～9月12日）

上 甌 村（9月27日～9月29日）

十 島 村（10月22日～10月26日）

三 島 村（11月9日～11月14日）

南種子町（12月2日～12月3日）

2. 身体障害者巡回診療

1月 輝北町，根占町

2月 国分市，長島町

3月 （南種子・西之表・中種子）

4月 穎娃町，高山町

5月 出水市，始良町，十島村

6月 市来町，松山町，川辺町

7月 （下甌村・鹿島村）

8月 （笠利町・大和村・龍郷町）吉松町，加世田市

9月 指宿市，喜界町，薩摩町

10月 鹿屋市，（宇検村・瀬戸内町・住用村），有明町

11月 川内市，霧島町，笠沙町

12月 祁答院町，三島村

3. 学校保健（統計報告）

積 山 幸 祐

平成11年度の鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科教室が担当した鹿児島県下の耳鼻咽喉科学学校検診は平成11年4月から11月にかけて行われた。その検診結果を集計し，部位別，地域別，学年別等で解析した。

<対象>

本年度に実施した地域は鹿児島市、垂水市、末吉町、財部町、穎娃町、輝北町、志布志町、内之浦町、西之表市、南種子町、里村、上甌村、下甌村、笠利町、天城町、龍郷町の16市町村で、受診者総数は14,879人であった。検診対象者は小学生から大学生にまで及ぶが、例年と同様に小学校、中学校、高校とも受診する学年が制限されているケースが多く、学年別の受診者数にはばらつきがみとめられた。

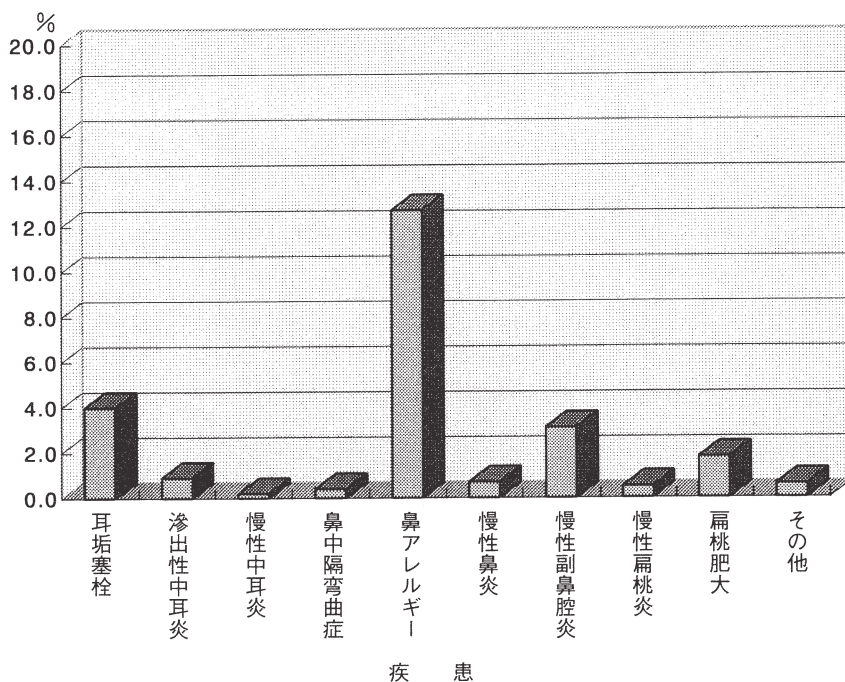
<方法> 検診の方法及び対象疾患については例年と同様である。

<結果>

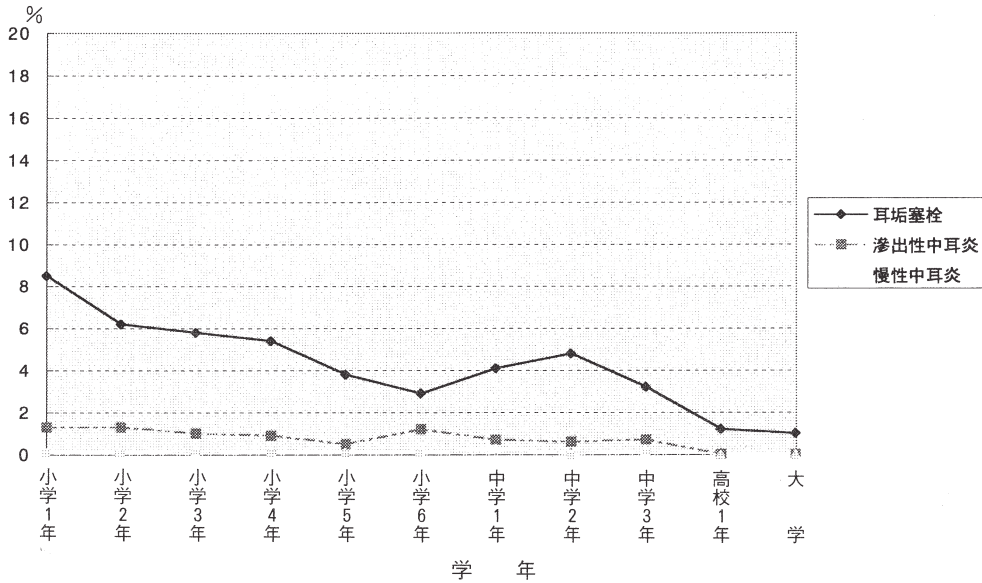
個々の疾患における全受診者の有病率をみると（図1）、例年と同様に鼻アレルギーが圧倒的に多い。次に耳垢栓塞、慢性副鼻腔炎、扁桃肥大の順であった。

図2と図3は鼻疾患及び耳疾患について学年別の推移を比較したものである。耳疾患（図2）では学年による大きな変化は見られなかった。しかし耳垢栓塞は、小学校、中学校とも低学年に多い傾向が見られた。鼻疾患（図3）では、各学年とも鼻アレルギーが高い有病率を有している。小学校低学年から上昇傾向が見られ、小学4年生以上では高い有病率を示した。慢性副鼻腔炎は学年が上がるに従って低下傾向を示した。

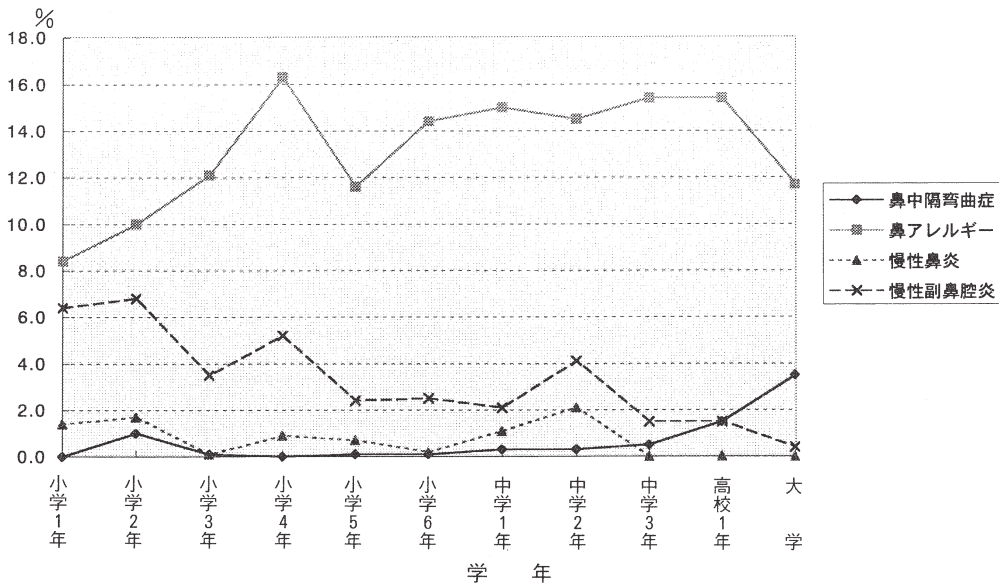
また、地域を市部（鹿児島市、垂水市）、郡部（穎娃町、財部町、末吉町、輝北町、



全疾患の有病率（図1）



学年別有病率（耳疾患）(図2)

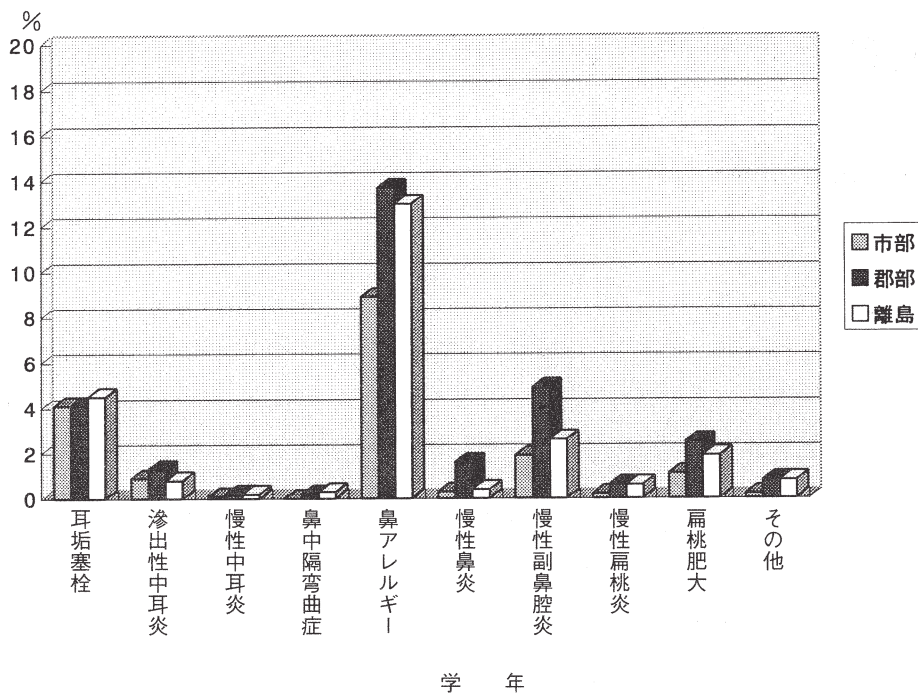


学年別有病率（鼻疾患）(図3)

志布志町，内之浦町），離島（西之表市，南種子町，里村，上甌村，下甌村，笠利町，天城町，龍郷町）に分けて比較した。(図4)

<考察>

平成11年度の学校検診の集計から得られた結果をまとめると，例年通り鼻アレルギーの有病率が他の疾患に比較して有意に高かった。これは市部，郡部，離島とも同様の結



地域別有病率 (図4)

果であり、地域による差はないと思われる。学年別に見ると鼻アレルギーは、全般的に高い値ではあるが小学校低学年から上昇傾向を示し、小学4年生以上では高い値（有病率）を維持している。鼻アレルギー発症時期は小学校低学年かそれ以前であり、それ以降の発症は少ないと推測される。耳垢塞栓は小学生、中学生とも低学年で高い有病率を示した。これも市部、郡部、離島とも同様の結果であり、地域による差はないと思われる。慢性副鼻腔炎は学年が上がるに従って低下傾向を示した。市部、郡部、離島比較すると郡部の有病率が高い。原因は定かではない。来年以降の推移を観察する必要があると思われる。その他の疾患に関しては、有病率は低く地域別、学年別ともに大きな変化はない。

以上のような結果であるが、我々は学校検診の意義を理解し、今後も各疾患における有病率の推移を注意深く観察し、学校保健、学校教育に役立てていく必要があると思われる。

VII. 特殊外来通信

1. アレルギー外来

昨年のさくらじまでもご紹介しましたとおりアレルギー外来は、ひきつづき毎週月曜日の午後にやっています。

本アレルギー外来では、新患でアレルギー性鼻炎の疑われる例や副鼻腔炎症例でもアレルギーの関与の疑われる例に対するアレルギー検査と、アレルギーと診断され当科でのフォローを希望された症例の治療を行っています。当科でのアレルギー検査では、皮内テスト8種、鼻汁中好酸球検査、鼻誘発テスト（市販のハウスダスト・ブタクサのディスクの他に、スクラッチエキスをを用いて5種可能）、末梢血中好酸球数、MASTによる吸入系抗原16種に対する特異的IgE値の検索のルーチンに行っています。治療は、やはり薬物による対症療法が主体ですが、免疫療法（特異的減感作療法）の説明も必ず行い、希望される患者さんには行っています。また下鼻甲介への炭酸ガスレーザー照射も症状と患者さんの希望に応じて実施しています。

1999年4月から12月までのアレルギー外来の患者数は、のべ440人ほどで1日あたり平均12人程度と、それ以前よりやや増えました。継続してフォローしている患者数は22人程度です。この期間にアレルギー検査を行ったのは130件ほどで、1日あたり平均約3.5件となっています。免疫療法としては現在3例に対しスギ花粉に対する特異的減感作療法を行っています。このうち1例は飯田富美子先生にお願いし毎週の注射は飯田先生のところで施行していただき、当科でも月1回フォローするという形をとっています。この3例は昨年4-5月に治療を開始しており今年のスギ花粉の飛散時期にどの程度効果が現われるか、患者さんのみならず我々も大いに期待しているところです。また他の開業の先生方にも免疫療法をお願いできたら幸いに存じます。

1999年4月からはアレルギー検査の結果のデータベースへの登録を始めました。

1999年4月から12月までのデータをみてみますと、検査を行った130例程のうち101例がアレルギーありと診断されました。皮内テストの陽性率はハウスダストは74例で73%、スギやカモガヤ、カンジダは約20例、20%でした。一方MASTによる特異的IgEの検査ではダニの陽性者は67例、66%、スギは48例、48%にもみとめられました。おもしろいことに1年中症状があると訴えていてもスギにしか感作されていない例もみられます。

スギに感作されている人が実際増えてきているのか、他の花粉抗原の感作状況等、今後データを蓄積し検討したいと考えています。

アレルギー外来を開設した目的は、

- 1) アレルギー検査を症例を集めて効率的に行う。
 - 2) 当科において確実にアレルギー性鼻炎の患者をフォローし、大学として新しい治療法や新薬の臨床試験のトライアルを行うとき理解の得られやすい環境をつくる。
 - 3) 現在、ふたたび脚光を浴びつつあるアレルゲン特異的免疫療法（特異的減感作療法）を、その進歩を取り入れながら、地域の先頭に立ってすすめていく。
 - 4) 粘膜免疫の研究を、アレルギー性鼻炎での臨床研究の分野でも展開していく。
- などでした。まだめざすアレルギー外来までは到達していませんが、目的達成をめざして努力していきたいと考えております。

（文責：河野）

2. 中耳炎外来

火曜日の午前中を中心に中耳炎外来として、滲出性中耳炎や急性中耳炎の症例の診療を行っています。特に現在、当教室では小児急性中耳炎に対する臨床研究に取り組んでいます。この研究では、小児急性中耳炎症例に対し初診時に抗生剤の投与を行わず、鎮痛剤の投与のみを対照的に行います。3日後の再診時に不変あるいは増悪傾向があれば抗生剤の投与を行いますが、改善傾向であればそのまま抗生剤の投与は行わず経過を見ることとします。大学病院の性格上急性中耳炎は夜間や休日に時間外受診する例がほとんどで、再診率が悪いのが悩みですが、それでも少しずつ症例が増えてきました。結果の一部は昨年11月に少し御紹介しましたが、多くの例で抗生剤を投与しなくても治癒する様です。急性中耳炎の主な起炎菌である肺炎球菌やインフルエンザ桿菌の薬剤耐性化が進む現在、こうした抗生剤を使わない治療も考える必要があると思います。今後さらに症例を積み重ねて検討していきたいと思っています。

（文責：牛飼）

3. 副鼻腔炎外来（第6回）

本年も副鼻腔炎外来は、内視鏡下鼻内副鼻腔手術（ESS）の術後治療と経過観察を中心に継続された。

平成11年1月から12月までの嚢胞性疾患も含めた副鼻腔炎に対する ESS 手術例は52例であった。その内容は、通常の慢性副鼻腔炎に対して行われた ESS が33例であった。33例の ESS 中9例（27.2%）で中鼻道所見の術野改善のために鼻中隔矯正術が同時に行われた。嚢胞性疾患に対して行われた ESS は17例で、術後性上顎洞嚢胞が10例、篩骨洞蝶形骨洞嚢胞が4例、前頭洞嚢胞が3例であった。ところで、内視鏡下手術の手技の点では、「眼窩吹き抜け骨折」特に下壁型で、さらに「前頭洞手術」でも臨床研究として注目すべき成果が出てきているので、改めて具体的に報告する機会を得たいと考えている。

噴霧式嗅覚検査の導入をめざし、鼻科学会の嗅覚検討委員会を中心に全国的なトライアルが行われている。当教室でも副鼻腔炎例の術前術後での嗅覚障害の評価を中心に噴霧式嗅覚検査のトライアルに参加している。嗅覚脱失例も含め約55%で術後の「改善」または「著明改善」が得られており、全国的な同様のデータが40数%から60%程度であることと比べまらずと云える。今後更なる治療成績の向上をはかるとともに、大学の責任として、全国的に役立てていただけるような質量ともに優れた同分野でのデータの蓄積に努力したい。

平成10年に厚生省による YAMIK 副鼻腔治療用カテーテルの輸入販売許可が得られて以来、今日ではディスプレイであるカテーテルの材料費とともに1回片側あたり80点（自然口開放処置30点＋副鼻腔洗浄50点）の保険点数が認められることになっている。点数の高い低いの議論はあろうが、大学および関連での同治療を原則的かつ系統的に行っていく足掛りにはなったと思う。現在大学で市販後調査を正式に契約実施しているが、当大学およびその関連での定着の促進のみならず、鼻科学会時のいわゆる「YAMIK 研究会」をベースに他大学との連携、連絡を強化し相互に刺激しつつ全国的に広がりのある多様な臨床研究の体制が築かれれば幸いである。

本外来と関連した、鼻副鼻腔炎領域での臨床、病態基礎研究に関する最近1年の主な業績（総説、原著等）は以下の如くである。

（学会一般口演、抄録原稿等は割愛する。）

松根彰志. 慢性副鼻腔炎の診断と治療. 総合臨床<診断の指針・治療の指針> 永井書店 *in press*.

松根彰志. 特集「副鼻腔炎の病態と治療」 洗浄療法—洞洗(副鼻腔洗浄)・YAMIK—味蕾 第49号 29-33, 1999.

松根彰志, 井手章子, 松尾克彦, 丸山征郎, 黒野祐一. 鼻副鼻腔炎症性疾患における血管内皮細胞増殖因子に関する予備的研究. 耳鼻免疫アレルギー, 17(1): 12-16, 1999.

大山 勝, 上野員義, 松根彰志, 花牟礼豊, 鶴丸浩士. 副鼻腔炎に対するマクロライド療法の現状. 耳鼻臨床, 92(6): 571-582, 1999.

林 多聞, 松根彰志, 黒野祐一. 術後性上顎洞嚢胞に対する内視鏡下鼻内手術. 耳鼻と臨床, 45(4): 369-374, 1999.

Miyahara T, Ushikai M, Matsune S, Ueno K, Katahira S, Kurono Y. Effect of Clarithromycin on Cultured Human Nasal Epithelial Cells and Fibroblast. Laryngoscope 110; 126-131, 2000.

Matsune S, Egawa M, Ohyama M, Kurono Y. Uptake of BrdU in olfactory and respiratory epithelium of rabbits with experimental sinusitis. Acta Otolaryngol (Stockh) *in press*.

Matsune S, Miyahara I, Ohyama M, Kurono Y. Application of YAMIK sinus catheter for patients with paranasal sinusitis with and without nasal allergy. Auris Nasus Larynx *in press*.

Nishimoto K, Matsune S, Miyadera K, Takebayashi Y, Furukawa T, Sumizawa T, Akiyama S, Kurono Y. The role of thymidine phosphorylase in the pathogenesis of allergic rhinitis. Acta Otolaryngol (Stockh) *in press*.

岩坪哲治, 松根彰志, 宮之原郁代, 西園浩文, 牛飼雅人, 黒野祐一. Haller's cell と慢性副鼻腔炎病態 —CTによる検討— 耳鼻臨床 *in press*.

高木 実, 松根彰志, 宮之原郁代, 牛飼雅人, 黒野祐一. 当科における上顎洞真菌症症例の検討 日鼻 *in press*.

(文責: 松根)

4. 頭頸部腫瘍外来

頭頸部腫瘍外来は、頭頸部腫瘍治療後の患者さんを対象に治療後の定期的 follow-up と治療法の評価を目的に毎週木曜日に特殊再来として行っている。1999年の新規登録者は68症例で、内訳は舌口腔悪性腫瘍が16症例で最も多く、ついで喉頭癌、中咽頭癌の順であった。登録患者総数は813症例にのぼる。頭頸部癌の治療法については、その主体を neo-adjuvant chemotherapy 後の手術療法としていることに変化はない。下咽頭癌については‘さくらじま13号’で御紹介したように術前化学療法の効果が自分たちの症例で確認できたことに力を得て、1クール目の化学療法で腫瘍縮小効果のある症例ではもう1クール化学療法を行い次いで手術をおこなうという方針に変化している。喉頭癌については喉頭部分切除術に積極的に取り組み、可能な限り喉頭保存に努めている。術後しばらくは誤嚥との戦いであるが、それを乗り切り外来で患者さんが自分の声で話される姿を見ると機能保存の大切さを改めて再認識させられる。これにより治療成績が落ちることがないように、診断の能力と手術の技術の向上を目指すべきであることはいうまでもない。

頭頸部腫瘍に関連した原著、および学会報告は以下の通りである。

1. 頭頸部悪性腫瘍治療後の味覚機能の検討（耳鼻と臨床45, 西元）
2. 中鼻道に発生した血管線維腫症例（耳鼻臨床92, 吉福）
3. 中咽頭、舌切除と嚥下機能（頭頸部外科学会, 松崎）
4. 尺側前腕皮弁による再建術（頭頸部外科学会, 平瀬）
5. 口腔底癌の浸潤と画像診断（頭頸部腫瘍合同セミナー, 松崎）
6. 頭頸部術後感染症における MRSA（鹿児島感染症研究会, 西元）
7. 中咽頭癌の予後不良因子（頭頸部腫瘍学会, 松崎）
8. 甲状腺結節性病変の画像診断（頭頸部腫瘍学会, 西園）
9. 鼻腔原始神経外胚葉性腫瘍（頭頸部腫瘍, 福岩）
10. 頭頸部4重癌症例（頭頸部分子腫瘍研究会, 西園）
11. 外鼻部悪性腫瘍症例（耳鼻臨床学会, 西元）
12. 顎下部腫瘍の検討（口腔咽頭科学会, 宮之原郁代）
13. 舌癌肉腫症例（口腔咽頭科学会, 宮之原利男）
14. 前頭蓋底手術症例（さくらじまフォーラム, 宮之原利男）
15. 喉頭部分切除症例（さくらじまフォーラム, 出口）

（文責：西園）

VIII. 1999年度病理集計（病練・外来）

担当 宮之原 利男

1) 悪性腫瘍（施行件数 147件，対象者 87名）

| | |
|--------------------------------|-----------------------------------|
| 咽頭腫瘍 15 | 鼻腔腫瘍 4 |
| SCC (15) | SCC (1) |
| | malignant melanoma (1) |
| 下咽頭腫瘍 14 | calcifying epithelial odontogenic |
| SCC (14) | tumour (1) |
| | undifferentiated carcinoma (1) |
| 舌腫瘍 10 | 口腔底腫瘍 3 |
| SCC (9) | SCC (3) |
| SO called carcinosarcoma (1) | |
| 中咽頭腫瘍 8 | 頬粘膜腫瘍 2 |
| SCC (8) | SCC (2) |
| 甲状腺腫瘍 5 | 歯肉腫瘍 1 |
| papillary carcinoma (5) | SCC (1) |
| 上咽頭腫瘍 5 | 中耳腫瘍 1 |
| SCC (5) | neuroendocrine cell tumor (1) |
| 上顎洞腫瘍 5 | 副咽頭腫瘍 1 |
| SCC (3) | mucoepidermoid carcinoma (1) |
| malignant melanoma (1) | |
| malignant fibrous histiocytoma | 下顎腫瘍 1 |
| (1) | malignant mixed tumor (1) |
| 耳下腺腫瘍 4 | malignant lymphoma 8 |
| adenocarcinoma (1) | 生検部位 |
| adenoid cystic carcinoma (1) | 頸部リンパ節 (3) |
| myoepithelial cell tumor (1) | 上咽頭 (2) |
| salivary duct carcinoma (1) | 中咽頭 (3) |

2) 良性腫瘍 (施行件数 55件, 対象者37名)

耳下腺腫瘍 9

pleomorphic adenoma (8)

basal cell adenoma (1)

甲状腺腫瘍 6

follicular adenoma (5)

oxyphilic adenoma (1)

鼻腔腫瘍 7

papilloma (2)

inverted papilloma (2)

hemangioma (3)

顎下腺腫瘍 4

pleomorphic adenoma (4)

頸部腫瘍 3

neuroepithelioma (1)

neurilemmoma (1)

lymphanginoma (1)

口腔底腫瘍 1

neurilemmoma (1)

副甲状腺腫瘍 1

adenoma (1)

中咽頭腫瘍 1

papilloma (1)

舌腫瘍 1

hemangioma (1)

硬口蓋腫瘍 1

papilloma (1)

喉頭腫瘍 1

papilloma (1)

頬粘膜腫瘍 1

hemangioma (1)

口唇腫瘍 1

fibroma (1)

Ⅸ. 各省庁諸研究

文部省科学研究費（平成11年12月現在）

基盤研究（B）（2）

アデノイド・扁桃（NALT）における粘膜免疫応答とその制御機構

代表者 黒野祐一

分担者 松根彰志，一宮一成，河野もと子

基盤研究（B）（2）

上気道感染症予防ワクチンの開発とその粘膜免疫応答に関する基礎的研究

代表者 黒野祐一

分担者 松根彰志，河野もと子，宮之原郁代，出口浩二

基盤研究（C）（2）

鼻副鼻腔炎粘膜における血管増殖制御機構に関する基礎的研究

－難治性慢性気道炎の病態解明と治療をめざして－

代表者 松根彰志

分担者 黒野祐一，河野もと子，牛飼雅人，宮之原郁代

基盤研究（C）（2）

鼻アレルギーにおけるヘルパー T 細胞のサイトカイン産生能と治療効果に関する研究

代表者 河野もと子

分担者 黒野祐一，松根彰志，西元謙吾

奨励研究（A）

味覚・嗅覚機能検査の標準化による「おいしさ」障害の研究

代表者 西元謙吾

基盤研究(A)(1)

上気道粘膜免疫機構と経鼻粘膜ワクチン開発の研究

代表者 茂木五郎

分担者 黒野祐一, 鈴木正志, 清野 宏, 川端五十鈴
岡本美孝, 山中 昇, 川内秀之

X. 業 績

1. 原 著

- (1) 黒野祐一, 藤橋浩太郎, 鈴木正志, 茂木五郎, 清野 宏: インフルエンザ菌外膜蛋白 P6 に対する鼻粘膜 IgA 応答における INF- γ の役割, 日本鼻科学会会誌, 37(2): 98-102, 1998
- (2) 黒野祐一, 平野 隆, 渡辺哲生, 鈴木正志, 茂木五郎: マウス実験的滲出性中耳炎モデルにおける IL-1 β の役割, 日本耳鼻咽喉科学会会報, 101: 1093-1098, 1998
- (3) 鈴木正志, 一宮一成, 渡辺哲生, 加藤博文, 後藤治典, 島村康一郎, 重見英男, 田中隆博, 松下 太, 藤吉達也, 分藤準一, 友永和宏, 黒野祐一, 茂木五郎: 通年性鼻アレルギーに対するペミロラストカリウムの有用性—鼻閉に対する効果を中心に—. 耳鼻と臨床, 44(2): 200-212, 1998
- (4) 黒野祐一, 鈴木正志, 坂本菜穂子, 兎玉 悟, 茂木五郎: ヒト扁桃の細菌抗原に対する免疫応答. 口咽科, 10(2): 161-167, 1998
- (5) 平瀬博之, 松崎 勉, 上野員義, 黒野祐一: 嚥下困難で判明した重症筋無力症例. 耳鼻臨床, 92(1): 95-99, 1999
- (6) 松根彰志, 井手章子, 松尾克彦, 丸山征郎, 黒野祐一: 鼻副鼻腔炎症性疾患における血管内皮細胞増殖因子に関する予備的研究. 耳鼻免疫アレルギー, 17(1): 12~16, 1999
- (7) 大山 勝, 上野員義, 松根彰志, 花牟礼 豊, 鶴丸浩士: 副鼻腔炎に対するマクロライド療法の現状. 耳鼻臨床, 92(6): 571~582, 1999
- (8) 黒野祐一, 鈴木正志, 茂木五郎: 上気道感染症と粘膜免疫. 日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌, 17(1): 176-179, 1999
- (9) 福山 聡, 牛飼雅人, 黒野祐一: 下極型扁桃周囲腫瘍の1例, 日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌, 17(1): 73-76, 1999
- (10) 小川和昭, 黒野祐一: 多発奇形を伴った中耳奇形. JOHNS, 15(3): 419-422, 1999
- (11) 黒野祐一: 反復性中耳炎の病態と治療. 耳鼻臨床, 92(5): 566-567, 1999
- (12) 西元謙吾, 松崎 勉, 西園浩文, 吉福孝介, 福山 聡, 黒野祐一: 頭頸部悪性腫瘍治療後の味覚機能の検討. 耳鼻と臨床, 45(4): 348-353, 1999
- (13) 花田武浩, 西元謙吾, 小濱紀子: 副咽頭間隙に生じた血管周皮腫の1例. 耳鼻咽喉科・頭頸部外科, 71(9): 571-574, 1999
- (14) 宇井直也, 茂呂八千世, 実吉健策, 永倉仁史, 小澤 仁, 今井 透, 遠藤朝彦, 森山 寛, 河野もと子, 松根彰志, 黒野祐一: 寄生虫感染とアレルギー性鼻炎. 耳鼻咽喉科免疫アレルギー, 17(2): 128-129, 1999
- (15) 花牟礼 豊, 相良ゆかり, 出口浩二, 笠野藤彦, 鹿島直子: 鼻副鼻腔・上咽頭腫瘍に対する Midfacial degloving 法の有用性. 頭頸部外科, 9(2): 119-123, 1999
- (16) 林 多聞, 松根彰志, 黒野祐一: 術後性上顎嚢胞に対する内視鏡下鼻内手術. 耳鼻と臨床, 45(4): 369-374, 1999
- (17) 吉福孝介, 西園浩文, 松崎 勉, 松根彰志, 西元謙吾, 黒野祐一: 中鼻道に発生した有茎性鼻咽腔血管線維腫, 耳鼻臨床, 92(11): 1205-1209, 1999

- (18) **Y. Kurono**, H. Shigemi, S. Kodama, G. Mogi: Effects of Oral and Systemic Immunization on Nasopharyngeal Clearance of Nontypeable *Haemophilus influenzae* in BALB/c Mice. *Laryngoscope*. 106(5): 614-618, 1996
- (19) M. Suzuki, **Y. Kurono**, S. Kodama, H. Shigemi and G. Mogi: Enhancement of Nasal Clearance of Nontypeable *Haemophilus influenzae* by Oral Immunization with Outer Membrane Proteins. *Acta Otolaryngol*. 118 : 864-869, 1998
- (20) **Y. Kurono**, D-J. Lim, G. Mogi: Middle ear and eustachian tube. In "Mucosal Immunology" Eds: Pearay L Ogra, Jiri Mestecky, Michael E Lamm, Warren Strober, Jerry R Mc Ghee, John Bienenstock. Academic Press, 1305-1311, 1999
- (21) **K. Deguchi**: Fucosylated (H type 3) Antigen in Mucociliary Culture is Expressed Mainly in the Ciliated Cell Lineage. *Medical journal of Kagoshima University*. 51(1) : 15~23, 1999
- (22) S. Matsushita, T. Nitanda, T. Furukawa, T. Sumizawa, A. Tani, **K. Nishimoto**, S. Akiba, K. Miyadera, M. Fukushima, Y. Yamada, H. Yoshida, T. Kanzaki, and S. Akiyama: The Effect of a Thymidine Phosphorylase Inhibitor on Angiogenesis and Apoptosis in Tumors. *Cancer Research*. 59(15) : 1911-1916, 1999
- (23) **T. Hanada**, **M. Iwashita**, **T. Matuzaki**, **Y. Hanamure**, K. Fukuda, S. Furuta: Synovial sarcoma in the parapharyngeal space: case report and review of the literature. *Auris Nasus Larynx*. 26 : 91-94, 1999
- (24) **Y. Kurono**, M. Yamamoto, K. Fujihashi, S. Kodama, M. Suzuki, G. Mogi, J.R. McGhee, and H. Kiyono: Nasal Immunization Induces *Haemophilus influenzae*-specific TH1 and TH2 Responses with Mucosal IgA and Systemic IgG Antibodies for Protective Immunity. *The Journal of Infectious Diseases*. 180(1) : 122-132, 1999
- (25) Y. Hatano, H. Terashi, S. Kurata, Y. Asada, H. Shibuya, A. Tanaka, H. Tada, S. Fujiwara, T. Watanabe, M. Suzuki, **Y. Kurono**, S. Takayasu: Invasion of lacrimal system by basal cell carcinoma. *Dermatol Surg*. 25(10) : 823-826, 1999
- (26) N. Watanabe, K. Yoshida, H. Shigemi, **Y. Kurono**, and G. Mogi: Temporal bone chondroblastoma. *Otolaryngol Head Neck Surg*. 121 : 327-330, 1999
- (27) Y. Kurono, K. Fujihashi, G. Mogi, H. Kiyono: The role of interferon (IFN)- γ in inducing IgA responses in nasal mucosa against outer membrane protein P6 of nontypeable *Haemophilus influenzae*. *Proceedings of The Third Asian Research Symposium in Rhinology*. *Rhinology*. 15 (Suppl) : 53-55, 1999
- (28) **Y. Kurono**, M. Suzuki, G. Mogi, M. Yamamoto, K. Fujihashi, J.R. McGhee, H. Kiyono: Effects of intranasal immunization on protective immunity against otitis media. *International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology*. 49(suppl 1) : S227-229, 1999
- (29) **T. Fukuiwa**, Y. Takebayashi, S. Akiba, **T. Matsuzaki**, **Y. Hanamure**, K.

- Miyadera, Y. Yamada, S. Akiyama: Expression of Thymidine Phosphorylase and Vascular Endothelial Cell Growth Factor in Human Head and Neck Squamous Cell Carcinoma and Their Different Characteristics. *Cancer*. 85(4) : 960-969, 1999
- (30) K. Ogawa, **Y. Hanamura**, **A. Sameshima**, **K. Nishimoto**, K. Sasaki: Anomaly of deep inferior epigastric vessels. *Otolaryngology-Head and Neck Surgery*. 121(4) : 499-501, 1999
- (31) J. Lewis, G.A. Olyer, **K. Ueno**, Y. Fannjlang, B.N. Chau, J. Vornov, S.J. Korsmeyer, S. Zou and J.M. Hardwick: Inhibition of virus-induced neuronal apoptosis by Bax. *Nature Medicine*. 5(7) : 832-835, 1999
- (32) N. Takenouchi, E. Matsuoka, T. Moritoyo, M. Nagai, K. Katsuta, K. Hasui, **K. Ueno**, Y. Eizuru, K. Usuku, M. Osame, Y. Isashiki, and S. Izumo: Molecular pathologic analysis of the Tonsil in HTLV-I-Infected Individuals. *Journal of Acquired Immune Deficiency Syndromes*. 22 : 200-207, 1999

2. 著 書

花牟礼 豊, 大山 勝

よくわかる立体組織学

第15章・呼吸器系 I, 鼻副鼻腔・咽喉頭部 (学際企画) : 313-320, 1999

3. その他

黒野祐一, 鈴木正志, 茂木五郎

特集 アレルギー疾患のオーバーラッピング「アレルギー性鼻炎と中耳炎」

アレルギーの領域 : 5(2)29-32, 1999

松根彰志

紙上診察室「だ液分泌機能の検査を」

南日本新聞, 1999年6月28日

松根彰志

「YAMIK副鼻腔炎治療用カテーテルで効果的な貯留液排泄と薬剤注入が可能に」

Medical Tribune, 1999年10月14日

馬場駿吉, 今野昭義, 川内秀之, 松根彰志

座談会「アレルギー性副鼻腔炎の診断と治療—抗アレルギー薬の選択基準も含めて—」

メディカル朝日 : 28(5)50-55, 1999

松根彰志

「洗淨療法－洞洗（副鼻腔洗淨）・YAMIK－」
美薈 49号, 29-33, 1999年11月20日 発行

黒野祐一

「アレルギー性鼻炎に他臓器疾患が重なるとき」
Allergy 21st Century 創刊号, 1999年12月10日 発行

松根彰志

紙上診察室「耳鳴り」
南日本新聞, 1999年12月20日

4. 国内学会発表

(1) 特別講演

第4回南九州上気道感染症臨床懇話会 1月9日（鹿児島）
「滲出性中耳炎のマクロライド療法」

黒野祐一

北九州市内科医師会講演会 2月8日（福岡）
「スギ花粉症－I型アレルギーの病態と治療－」

黒野祐一

日本耳鼻咽喉科学会広島県地方部会研修会 2月18日（広島）
「上気道の免疫・アレルギー」

黒野祐一

鹿児島県内科医会後期医学会 2月20日（鹿児島）
「蓄膿の治療法の新しい展開」

松根彰志

大分医科大学講義 3月2日（大分）
「鼻・副鼻腔腫瘍の診断と治療」

黒野祐一

鹿児島県耳鼻咽喉科医会特別講演会 4月10日（鹿児島）
「顔面外傷の診断と治療」

黒野祐一

化血研医学セミナー 5月11日（熊本）
「上気道粘膜免疫－中耳炎予防ワクチンの展望－」
黒野祐一

日耳鼻熊本県地方部会学術講演会 5月11日（熊本）
「滲出性中耳炎の病態と治療－免疫学的観点から－」
黒野祐一

熊本大学医学部講義 5月12日（熊本）
「上気道感染症と粘膜免疫」
黒野祐一

熊本県地区医師会講演会 5月14日（熊本郡）
「一般臨床における耳鼻咽喉科感染症－その診断と治療－」
黒野祐一

KBC アレルギー懇話会 7月25日（福岡）
「扁桃とアレルギー」
黒野祐一

岡山大学医学部耳鼻咽喉科特別講義 7月29日（岡山）
「上気道における免疫とアレルギー」
黒野祐一

岡山市耳鼻咽喉科医師会講演会 7月29日（岡山）
「免疫学的にみた中耳炎の病態と治療」
黒野祐一

大口伊佐医師会学術講演会 8月19日（大口）
「耳鼻咽喉科感染症の病態と治療」
黒野祐一

第29回 日本耳鼻咽喉科感染症研究会・第23回日本医用エアロゾル研究会
9月4日～5日（岡山）
「エアロゾルによる上気道ワクチン療法の可能性」
黒野祐一

鹿児島大学歯学部公開講座 10月17日（鹿児島）
「摂食・嚥下障害と口腔保健 嚥下障害患者のリハビリテーション」
黒野祐一

徳島市耳鼻咽喉科医師会学術講演会 10月21日（徳島）

「上気道感染症における最近の話題」

黒野祐一

日耳鼻第81回沖縄県地方部会特別講演会 12月4日（沖縄）

「中耳炎の病態と治療－免疫学的考察と展望－」

黒野祐一

(2) シンポジウム

第12回日本口腔・咽頭科学会 10月28日（宮城）

扁桃シンポジウム 病巣感染症－掌蹠膿疱症と IgA 腎症を中心に－

「扁桃のケラチンに対する免疫応答」

黒野祐一

第61回 耳鼻咽喉科臨床学会 6月25日～26日（大分）

「YAMIK カテーテルと副鼻腔感染症の診断・治療」

松根彰志

(3) 教育講演

第14回 九州連合地方部会学術講演会 8月28日～29日（福岡）

「副鼻腔炎の免疫・病態解明と新しい治療への応用」

松根彰志

(4) 一般

第9回 日本頭頸部外科学会総会・学術講演会 1月22日～23日（千葉）

「中咽頭・舌切除と嚥下機能」

松崎 勉, 西園浩文, 平瀬博之, 西元謙吾, 黒野祐一

「尺側前腕皮弁による再建の3症例」

平瀬博之, 松崎 勉, 西園浩文, 黒野祐一

頭頸部腫瘍合同セミナー 1月25日（鹿児島）

「口腔底癌の浸潤と画像診断」

松崎 勉, 福岩達哉, 高木 実, 吉福孝介, 黒野祐一

「小児耳下腺結核が疑われた一例」

平瀬博之, 福山 聡, 岩坪哲治, 森園健介, 黒野祐一

第21回鹿児島感染症研究会 2月12日（鹿児島）

「頭頸部術後感染症における MRSA」

西元謙吾, 西園浩文, 松崎 勉, 松根彰志, 黒野祐一

第17回 耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 3月25日~26日(栃木)

「慢性副鼻腔炎におけるインフルエンザ菌外膜蛋白 P6 に対する特異的免疫応答」

宮之原郁代, 松根彰志, 大城 浩, 黒野祐一

「鼻由来培養細胞へのマクロライドの影響」

宮之原利男, 牛飼雅人, 黒野祐一

「アデノイド線維芽細胞における NF- κ B の活性化と IL-8 発現」

高木 実, 宮之原利男, 牛飼雅人, 黒野祐一

「寄生虫感染とアレルギー性鼻炎」

宇井直也, 茂呂八千代, 実吉健策, 永倉仁史, 小澤 仁, 今井 透, 遠藤朝彦,

森山 寛, 河野もと子, 松根彰志, 黒野祐一

第53回 日本口腔科学会総会 4月15日~16日(東京)

「Relationship between maxillofacial morphology, nasopharyngeal obstruction and dysphagia.」

西園浩文, 花田武浩, 黒野祐一, 小椋幹記, 木佐貫 聡, 大勝貴子, 黒江和斗,

伊藤学而

第26回日耳鼻南九州合同地方部会学術講演会 4月17日~18日(鹿児島)

「鼻粘膜培養細胞へのマクロライドの作用」

宮之原利男, 牛飼雅人, 高木 実, 松根彰志, 黒野祐一

「頭蓋内コレステリン肉芽腫の1症例」

笠野藤彦, 相良ゆかり, 花牟礼 豊, 鹿島直子

「骨病変で発症した原発性副甲状腺機能亢進症の1症例」

花田武浩, 岩下睦郎

「耳下部石灰化上皮腫の1症例」

西元謙吾, 平瀬博之, 西園浩文, 松崎 勉, 黒野祐一

「顎下部に発生した多発性皮様嚢胞の1例」

森園健介, 西元謙吾, 牛飼雅人, 河野もと子, 黒野祐一

第19回気道分泌研究会 5月8日(三重)

「インフルエンザ菌外膜蛋白 P6 に対する鼻副鼻腔の特異的免疫応答」

宮之原郁代

第11回 日本アレルギー学会春期臨床大会 5月13日~15日

「スギ花粉症の全国的疫学調査(第2報)」

茂呂八千代, 宇井直也, 実吉健策, 永倉仁史, 小澤 仁, 遠藤朝彦, 渡辺直熙,

今井 透, 岸川禮子, 黒野祐一, 松根彰志, 河野もと子, 本田 靖, 新田裕史,

瀧口俊一, 名和行文

第100回 日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 5月20日～27日（宮崎）

「アデノイド線維芽細胞からの IL-8 産生における NF- κ B の役割」

牛飼雅人, 高木 実, 宮之原利男, 黒野祐一

「扁桃疾患と顎顔面形態異常についての検討」

西園浩文, 高木 実, 黒野祐一

「鼻副鼻腔におけるインフルエンザ菌外膜蛋白 P6 に対する局所免疫応答」

宮之原郁代, 松根彰志, 大城 浩, 黒野祐一, 松山隆美

第23回 日本頭頸部腫瘍学会・第20回 頭頸部手術手技研究会 6月16日～18日（千葉）

「頭頸部癌における Bcl-X の発現－化学療法感受性の指標となり得るか？－

上野員義, 平瀬博之, 西園浩文, 松崎 勉, 黒野祐一

「中咽頭癌の予後不良因子の検討」

松崎 勉, 西園浩文, 福岩達哉, 黒野祐一

「甲状腺結節性病変の術後画像診断に関する検討」

西園浩文, 関 大八郎, 松崎 勉, 西元謙吾, 平瀬博之, 黒野祐一

「鼻腔に発生した原始神経外胚葉性腫瘍（PNET）の一症例」

福岩達哉, 牛飼雅人, 森園健介, 河野もと子, 松根彰志, 梅北善久, 黒野祐一

第3回 頭頸部分子腫瘍学研究会 6月18日（千葉）

「汎発性脂肪萎縮症に合併した頭頸部4重癌の1症例」

西園浩文, 上野員義, 福岩達哉, 福山 聡, 黒野祐一, 吉田愛知, 吉田浩己

第61回 耳鼻咽喉科臨床学会 6月25日～26日（大分）

「眼症状をともなう副鼻腔炎症例の検討」

河野もと子, 宮之原利男, 森園健介, 福岩達哉, 福山 聡, 西元謙吾, 林 多聞,

松根彰志, 黒野祐一

「外鼻部悪性腫瘍の再建例4症例」

西元謙吾, 松崎 勉, 牛飼雅人, 平瀬博之, 黒野祐一

「小児耳下腺結核の1症例」

岩坪哲治, 西園浩文, 平瀬博之, 高木 実, 黒野祐一

第6回 マクロライド新作用研究会 7月9日～10日（東京）

「鼻粘膜由来培養細胞に対するマクロライドの影響」

宮之原利男, 牛飼雅人, 松根彰志, 黒野祐一

第13回 Bacterial Adherence 研究会 7月17日（鹿児島）

「呼吸上皮傷害に伴う炎症の慢性化について」

出口浩二, 花牟礼 豊, 松根彰志, 黒野祐一

第14回 九州連合地方部会学術講演会 8月28日～29日（福岡）

「小児上顎洞血瘤腫の一症例」

積山幸祐, 出口浩二, 西園浩文, 平瀬博之, 岩元光明, 黒野祐一

「当科における上顎洞真菌症の診断と治療」

高木 実, 松崎 勉, 松根彰志, 黒野祐一

「頭頸部多発性神経鞘腫を認めたレックリングハウゼン病の一症例」

岩坪哲治, 西元謙吾, 松崎 勉, 黒野祐一

第17回 日本ヒト細胞学会 8月26日~27日(鹿児島)

「鼻副鼻腔炎粘膜腺組織と血管内皮増殖因子」

松根彰志

第29回 日本耳鼻咽喉科感染症研究会・第23回日本医用エアロゾル研究会

9月4日~5日(岡山)

「眼症状を伴う副鼻腔炎症例の検討」

河野もと子, 森園健介, 福岩達哉, 福山 聡, 宮之原利男, 西元謙吾, 林 多聞,

松根彰志, 黒野祐一

「頭頸部領域における結核症例の検討」

高木 実, 西園浩文, 松崎 勉, 松根彰志, 黒野祐一

第9回 日本耳科学会 9月9日~11日(東京)

「Kanzaki(神崎)病症例の神経耳科学的検討」

河野もと子, 宮之原利男, 吉井典子, 神崎 保, 黒野祐一

「滲出性中耳炎におけるエンドトキシン, s-CD14 の役割

大城 浩, 牛飼雅人, 松根彰志, 黒野祐一

「ペニシリン耐性肺炎球菌を起炎菌とする反復性急性乳様突起炎の一例」

福岩達哉, 松根彰志, 西園浩文, 松崎 勉, 黒野祐一

「頭蓋内コレステリン肉芽腫の1症例」

笠野藤彦, 相良ゆかり, 花牟礼 豊, 鹿島直子

「当科における Anterior Spinothomy 手術」

相良ゆかり, 笠野藤彦, 花牟礼 豊, 鹿島直子

第38回 日本鼻科学会総会 9月30日~10月2日(千葉)

「鼻副鼻腔炎における粘膜腺組織の分布と血管内皮増殖因子」

松根彰志, 松尾克彦, 宮之原利男, 牛飼雅人, 丸山征郎, 黒野祐一

「培養細胞の繊毛新生過程で特異的に発現される H type 3 抗原について」

出口浩二, 松根彰志, 牛飼雅人, 宮之原利男, 花牟礼 豊, 黒野祐一

「慢性副鼻腔炎におけるエンドトキシンと SCD14 に関する検討」

大城 浩, 松根彰志, 宮之原郁代, 黒野祐一

「スギ花粉症の全国的疫学調査(第3報)」

大森剛哉, 宇井直也, 茂呂八千代, 実吉健策, 野原 修, 片山 昇, 永倉仁史,

小澤 仁, 今井 透, 遠藤朝彦, 森山 寛, 河野もと子, 松根彰志, 黒野祐一

第2回 副鼻腔 YAMIK 研究会 10月2日(千葉)

「YAMIK と病態研究」

松根彰志, 黒野祐一

第49回 日本アレルギー学会総会 10月18日～20日 (広島)

「鼻アレルギー粘膜における Thymidine Phosphorylase の分析」

西元謙吾, 松根彰志, 河野もと子, 黒野祐一

第12回 日本口腔・咽頭科学会総会・学術講演会 10月28日～30日 (宮城)

「扁桃のケラチンに対する免疫応答」

黒野祐一, 岩坪哲治, 林 多聞, 出口浩二

「口蓋扁桃摘出術後の口腔咽頭形態についての検討」

西園浩文, 高木 実, 黒野祐一, 小椋幹記, 伊藤学而

「当科における顎下部腫瘍の検討」

宮之原郁代, 松崎 勉, 西園浩文, 牛飼雅人, 松根彰志, 黒野祐一

「うまみ」物質に対する正常者の味覚閾値」

西元謙吾, 高木 実, 黒野祐一

「舌に発生した carcinosarcoma の1症例」

宮之原利男, 河野もと子, 松根彰志, 黒野祐一

第19回 九州MMC研究会 11月20日 (福岡)

「難治性突発性難聴例に対する ProstaglandinE1 の使用経験」

岩坪哲治, 松根彰志, 宮之原郁代, 西園浩文, 黒野祐一

第2回 耳鼻咽喉科桜島フォーラム 12月9日 (鹿児島)

「他科で診断が困難であったためまい症例」

岩坪哲治

「頭蓋内進展を認める鼻副鼻腔癌の手術治療」

宮之原利男

「咽頭部分切除を行った2症例」

出口浩二

「真珠腫性中耳炎に対する手術治療」

河野もと子

「マクロライドおよび抗アレルギー剤と NF- κ B」

牛飼雅人

「掌蹠膿胞症のメカニズム」

黒野祐一

5. 国際学会発表

MOLECULAR DETERMINANTS OF SENSITIVITY TO ANTITUMOR AGENTS
March 4-8 (Whistler, British Columbia, Canada)

「Bcl-X Expression in Head and Neck Cancers: Possible Indicator of Chemoresistance」

K. Ueno, T. Itoh, T. Matsuzaki, H. Nishizono, H. Hirase, Y. Kurono, Y. Eizuru

10TH INTERNATIONAL CONGRESS OF MUCOSAL IMMUNOLOGY June 27-
July 1 (Amsterdam, The Netherlands)

「THE ROLE OF INTERFERON GAMMA (INF- γ) IN INDUCING IgA
RESPONSES AGAINST NONTYPEABLE *HAEMOPHILUS INFLUENZAE*」

Y. Kurono, K. Fujihashi, J.R. McGhee and H. Kiyono

7TH INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON RECENT ADVANCES IN OTITIS
MEDIA. June 1-5, (Miami, Florida, USA)

「The role of INF- γ in producing IgA responses against nontypeable
Haemophilus influenzae」

Y. Kurono

The 5th Ajou Otologic Symposium: Sep 3 (Ajou University School of Medicine,
Ajou, Korea)

「Mucosal immunology in upper respiratory tract-application for otitis media」

Y. Kurono

4th INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON TONSILS AND ADENOIDS November
2-5 (Ghent, Belgium)

「Keratin-specific immune response of tonsil」

Y. Kurono, T. Iwatsubo, T. Hayashi, K. Deguchi

「Cytokine Production of CD14-positive Cells in Palatine Tonsils-Comparison
with Monocytes in Peripheral Blood」

M. Kono, and Y. Kurono

6. 学位論文要旨

医研第411号

Expression of Thymidine Phosphorylase and Vascular Endothelial Cell Growth Factor in Human Head and Neck Squamous Cell Carcinoma and Their Different Characteristics.

(ヒト頭頸部扁平上皮癌における Thymidine Phosphorylase と VEGF の発現 - 両因子の異なる特性 -)

<目的>

Thymidine Phosphorylase (dThdPase) は血管新生活性を持っており、また Vascular Endothelial Cell Growth Factor (VEGF) も血管新生活性と血管透過性亢進活性をもつ。これらの血管新生因子は固形腫瘍で発現が高く、dThdPase は大腸癌や腎癌で、VEGF は乳癌でそれぞれ予後因子であるとの報告がある。今回我々はヒト頭頸部扁平上皮癌におけるこれら因子の発現を調べ、腫瘍血管新生との関係、腫瘍増殖との関係、さらに臨床病理学的因子との関係について調べた。血管新生の指標として微小血管数測定を行い、また腫瘍細胞増殖の指標として Proliferating Cell Nuclear Antigen (PCNA) の発現率を用いて、これらと dThdPase, VEGF の発現率の関係を調べた。

<対象と方法>

当科で治療を行なった95症例について検討した。dThdPase については monoclonal 抗体を用い、VEGF については polyclonal 抗体を用いてそれぞれ免疫組織化学的染色を行なった。微小血管数測定のため第Ⅷ因子に対する polyclonal 抗体を使用した免疫組織化学的染色を行なった。腫瘍増殖の指標として PCNA に対する monoclonal 抗体を使った免疫組織化学的染色を行なった。これら染色結果より dThdPase, VEGF, PCNA の発現率を算出し、微小血管数の測定値も調べた。

<結果>

VEGF の発現は微小血管数と有意に相関していたが、dThdPase の発現と微小血管数との間には有意差は認められなかった。一方 dThdPase の発現は PCNA の発現と有意に相関しており VEGF と PCNA の発現に有意差はなかった。臨床病理学的因子との関係では VEGF の発現と腫瘍原発部位との間に有意差が認められたが、その他の因子間では有意な関係は認められなかった。

<考察>

ヒト頭頸部扁平上皮癌では VEGF が腫瘍血管新生に関与していることが示唆された。

dThdPase の腫瘍血管新生への関与は今回の結果では明らかにされなかったが、その一方で腫瘍増殖能との間に有意な関係が認められたことより、dThdPase は血管新生以外の作用で腫瘍増殖に関与していることが示唆された。

(*Cancer*, 1999年 85(4) 960-969, 掲載)

医研第427号

Expression of glycoconjugates in normal and Sjögren's syndrome labial glands.

(正常及びシェーグレン症候群唾液腺における複合糖質の発現)

Jorge Sidagis

[INTRODUCTION]

Minor salivary glands produce nearly 10% of the salivary volume and secrete as much as 70% of mucins found in whole saliva. Mucins are involved in protection against desiccation and environmental insult, and serve as lubrication and defense against microorganisms. Terminal sialic acid is regarded as involved in these functions. In Sjögren's syndrome (SS), a benign autoimmune-mediated destruction of the lacrimal and salivary glands, these protective functions of saliva appear altered, resulting in increased dental caries and non-oral infections (such as candidiasis). Lack of salivary mucins could explain these symptoms. Minor glands are involved in 70% of cases of SS, but labial glands' biopsy is considered essential for its diagnosis.

Lectin-based histochemical studies in normal human labial glands and sialochemical studies of SS have been done, but no previous reports were found on the detection of glycosidic residues in SS labial glands using lectins. This study attempts to determine the expression of sugar residues in histologically normal and SS labial glands by means of lectin histochemistry, and assess differences by statistical analysis.

[MATERIAL AND METHODS]

Specimens of lip salivary glands were obtained from patients who presented to the Otolaryngology Department of Kagoshima University complaining of xerostomia. Twelve histologically normal and nine SS formalin-fixed paraffin-embedded specimens were used in this study. A wide panel of biotinylated lectins, including WGA, MAA, SNA, PNA, Con A, Amaranthin, UEA 1, SBA, DBA and succinylated WGA, was used to characterize and semiquantitate glycosidic

residues in serial sections. The standard avidin-biotin (ABC) procedure was used for detection, and 3-amino 9-ethyl carbazole peroxidase (AEC) served as color substrate. The data were tested with 2-factor analysis of variance (ANOVA), regarding percentage of cells as function of group and intensity of staining.

[RESULTS AND DISCUSSION]

Mucous cells expressed mainly mucous-type glycoproteins including sialyl, fucosyl, galactosyl and galactosaminosyl residues, as well as some N-linked glycoconjugates, being evident the heterogeneity in terminal residues in these cells. Demilunes expressed mainly serum type sugars (α D-mannose and GlcNAc), immature mucins (Gal β 1,3-GalNAc) and few fucomucins or other mature mucins. Therefore, we regard these cells as seromucous. Dust cells and cellular glycocalix demonstrated sugar residues suggestive of the presence of mucous-and serous-type glycoproteins. The luminal contents of ducts were stained with all the lectins used, revealing a mixed secretion.

Samples of SS showed the same general binding pattern as the normal group. However, increased expression of sialic acid α 2,3 linkages and GlcNAc, and lower expression of Gal β 1,3-GalNAc, α D-mannose, α L-fucose and α GalNAc was found. A statistically significant increase in expression of GlcNAc, and a significantly decreased expression of Gal β 1,3-GalNAc and α D-mannose, was found ($p < 0.05$). Mucous cells appeared functionally unimpaired, and it is supposed that other factors, as substitution and atrophy of the acini and/or stasis at the duct level, contribute to the dysfunction found in xerostomia.

(Acta Otolaryngologica (Stockh) 1997; 117: 871-877, 掲載)

医研第425号

Fucosylated (H type 3) Antigen in Mucociliary Culture is Expressed Mainly in the Ciliated Cell Lineage.

(培養細胞の繊毛新生過程で特異的に発現されるH type 3抗原について)

出口 浩 二

目的 (背景) :

呼吸上皮における繊毛細胞は、外来異物の侵入に対する防御機構の一つとして重要な役割を果たしている。感冒や慢性副鼻腔炎症例においてはこれらの繊毛上皮の障害を認め、それに伴い粘液繊毛系での異物排除能力の低下を認める。このように重要な機能を

有する繊毛細胞は、一般には基底細胞や分泌細胞から最終的に分化した状態であると言われている。しかしながら、この細胞分化および繊毛新生過程については、完全には解明されていない。このため、この繊毛新生過程の機序を解明すべくこの分化過程に特異的な H type 3 抗原を認識するマーカーを作製した。

方法：

呼吸上皮細胞の繊毛新生，分化誘導法として floating culture model を用いた。鼻副鼻腔粘膜の呼吸上皮細胞を用いて floating culture を行い，繊毛新生開始 3 日目から 5 日目の培養細胞を抗原とした単クローナル抗体作製を行った。それらの単クローン抗体のうち，floating 後 0 日目の細胞に陰性で 3 日目に陽性であり，安定して産生される一種類の抗体（RPCS3a）の特性を Cellular ELISA，免疫染色，Western blotting, ELISA を用いて調べた。

結果：

培養細胞の RPCS3a 免疫染色においては，3 日目から 14 日目において中間層から表層部分に陽性細胞を認めた。また，Cellular ELISA においても 3 日以降で陽性反応を認めているが，10 日目前後の細胞において発現強度のピークを認めた。この 10 日目前後の培養細胞を TEM で観察すると，表層部に分泌顆粒を有する細胞の中に多くの中心小体を持った細胞を多数認め，繊毛細胞の前駆細胞であることが伺われた。鼻副鼻腔粘膜を用いて，RPCS3a 免疫染色を行うと，分泌細胞，粘液腺細胞が陽性となり，繊毛細胞，基底細胞は淡く染色され，漿液腺細胞は全く染色されなかった。Western blotting では，RPCS3a が糖鎖に対する抗体であることを示唆する広い band を示し，ELISA では H type 3 抗原という糖鎖抗原に対して高い特異性を示した。また，この抗体は，A および AB の血液型の組織に対してのみ陽性反応を示した。

考察：

RPCS3a にて認識される H type 3 抗原の発現量は Cellular ELISA によって，培養細胞の繊毛新生過程により変化し，その分化レベルを反映していることを示された。このことより，H type 3 抗原は繊毛新生といった単一の細胞の分化過程における一つの特異的なマーカーとして考えられる。分化過程の中で表層部に中心小体を多数持った繊毛細胞の前駆細胞を認めたが，この領域に H type 3 抗原の発現が強く認められた。この H type 3 抗原の検索を進めることにより，今後，繊毛細胞の分化の機序を解明することが可能になると考えられる。

（鹿児島大学医学雑誌 1999年 51(1) 15～23, 掲載）

Relation of Olfactory Event-related Potentials to Changes in Stimulus Concentration

(嗅覚刺激物質の濃度の嗅覚誘発脳電図に及ぼす影響)

豎山俊郎

(目的)

嗅覚誘発脳電図 (Olfactory Event-related Potentials, 以下 OERP) における各種パラメーターの, 臭い物質に対する濃度依存性を検討する。

(方法)

- ① 男女8人ずつの17歳から34歳 (平均年齢26歳) までの嗅覚障害のない健常人を対象とし、それぞれ、24時間以上の間隔をあけて4回の実験を行った。
- ② 嗅覚刺激は propylene glycole に溶解させた vanillin 粉末を用い、これを4段階の濃度 (7, 28, 58, 84% v/v) に空気と混合、希釈し、無作為に、それぞれの鼻腔に20m秒以下のパルスとして Olfactometer (Burghurt 社製) より与え、OERP を計測した。鼻腔内には常時一定量の空気が流れ込んでおり、それぞれの濃度の刺激は16回、呼吸と関係なく与えられた。刺激の間隔は40秒とした。被験者は実験の前に特殊な呼吸法 (Velopharyngeal Breathing) を指導され、実験中約40分間は鼻呼吸を避けるようにした。
- ③ 脳電図は10/20法による Fz, Cz, Pz の正中3ヶ所で P1, N1, P2, P3 4つのピークの Amplitude と Latency を計測した。基線の計測のため、刺激直前 500m 秒から計測を行い、瞬きによる $50\mu\text{v}$ 以上のアーチファクトを除外した。
- ④ 被験者の受ける感覚的な刺激の強さ (Intensity) と、実際の刺激濃度との関係を検討するため、前者をスケール化して、58%v/v の濃度を標準とし、それぞれの刺激後にモニター上に示させた (Intensity rating)。
- ⑤ 被験者の嗅覚の閾値と OERP のパラメーターとの関係を検討するため、実験の後10~20分間に嗅覚閾値テスト (Sniffin' Sticks) を行った。
- ⑥ 統計学的処理は MANOVAS (濃度, 計測部位, 被験者要因, 年齢等を要素とする) を用いた。

(結果)

OERP の Peak-to-Peak Amplitude は嗅覚刺激物質の濃度依存性に有為に大きくなり、Base-to-Peak Amplitude P3 において最も顕著であった。反対に latency は濃度依存性に短縮した。記録部位としては、Amplitude N1, P1N1 を除き、Pz 部で Amplitude の最大値を認めた。Pz において P3 の Peak Latency は最も長くなった。

被験者の Intensity rating は刺激の濃度との有為な相関関係が見出された。

また、Sniffin' Sticksでの閾値検査では、閾値と OERP Amplitudes とに相関関係は認めなかったが、閾値が低い被験者は、OERP Latencies の短縮を認めた。

(考察)

これまでの本領域の研究では三叉神経刺激成分を含む刺激物質が用いられていたため、本研究では純粋な嗅覚刺激とされるバニラエキスを用いた。その結果、嗅覚刺激物質の濃度の増加に伴い OERP Amplitude が増加し、OERP Latency は減少すること、更に OERP Latency は、特に早期の波形である P1, N1 において顕著に短縮し、OERP Amplitude は遅発性の波形において増加することが示された。また、OERP Amplitude に比べて OERP Latency は、嗅覚刺激の強度 (Intensity) と強く相関することが示された。

1997年、Pause 等は同じくバニラエキスを用い、OERP Latency は刺激濃度の増加により短縮するが、OERP Amplitude とは相関関係はない、との結果を発表した。しかし彼等の実験では、刺激濃度を一定にしたまま繰り返し刺激し、次に1段ずつ高い濃度で繰り返すという刺激方法をとっていることから、嗅覚神経の適応性または習慣性という状態を作り出した可能性がある。本実験では各濃度をランダムに与えることによりその問題点を回避した。

今後 OERP の各要素と、現在行われている嗅覚閾値テストや T & T Olfactometer 等の認知検知テスト等との相関性、更に嗅覚記憶に対する関連性、更には被験者が刺激濃度を区別できない場合や知覚できない場合についても研究を行う必要があると考えられる。

(Electroencephalography and clinical Neurophysiology 1998; 108: 449-455 掲載)

医研第427号

Retinoblastoma Protein Expression and Prognosis in Laryngeal Cancer

(喉頭癌における Retinoblastoma 蛋白発現と予後との関係)

土器屋 富美子

近年、癌組織の発生進展過程において、多くの癌遺伝子と癌抑制遺伝子が関与することが示唆されている。これら癌化に関与する遺伝子の中でも Retinoblastoma (Rb) 癌抑制遺伝子は、多くの癌組織について報告がなされており、この癌抑制遺伝子が、各臓器における癌組織の発生過程のいかなる時期に関与しているかが、注目されている。今回、喉頭癌症例について、Rb 蛋白の発現を免疫組織学的に検索し、臨床経過、とくに予後との関連性を中心に検討した。

(研究方法)

1985年から1995年までの10年間に、鹿児島大学医学部附属病院耳鼻咽喉科で、喉頭癌の診断にて治療を行った患者72症例から得られた腫瘍組織89検体(17例の重複例を含む)を対象とした。症例の性別は、男性69例、女性3例で、外来初診時の年齢は、40歳から82歳であった。組織学的診断の内訳は、扁平上皮癌84例、上皮内癌1例、異型上皮4例であった。

これらの腫瘍組織を10%ホルマリン液にて固定後パラフィン包埋し、切片作成後、一次抗体にPhamingen社のマウス抗ヒトRbモノクローナル抗体(G3-245)を用い、ABC法を行い免疫組織化学的に検討した。なお対照としては、両側反回神経麻痺のため喉頭摘出術を余儀なくされた患者3名より得られた喉頭組織を用いた。

(結果)

全症例のRb蛋白の発現様式を見ると、腫瘍組織のほぼ全領域にRb蛋白陽性細胞を認める群、Rb蛋白は一部で陽性であるものの明らかに陽性細胞の欠落した領域を認め斑紋状にみえる群、全くRb蛋白陽性細胞を認めない群の3群に分類された。そこで後者2群をRb蛋白陰性群として、その臨床経過をRb蛋白陽性群と比較検討した。

その結果Rb蛋白陰性群は、陽性群と比較して有意にリンパ節転移が見られ、また進行癌症例が多く、五年生存率が低かった。しかしながら、腫瘍細胞の分化度とは有意な相関関係が認められなかった。

(考察)

Rb蛋白は細胞死を抑制する因子と考えられており、Rb蛋白の欠落した細胞は、Rb蛋白陽性細胞と比較して、細胞死を起こしやすいことが報告されている。従って、喉頭癌においてもRb遺伝子の変異が喉頭癌の細胞死に関与し、癌の進展度、さらには患者の予後に何らかの影響を及ぼすと推測された。

(Acta Otolaryngol (Stockh) 1998; 118: 759-762 掲載)

医論第1254号

Clinical Significance of Asymptomatic Sinus Abnormalities on Magnetic Resonance Imaging

(MRIによる無症候性副鼻腔病変の臨床的検討)

岩 淵 康 雄

[目的]

副鼻腔炎治療中に症状が消失したにもかかわらず、X線検査にてなお陰影を認めることや、偶発的に副鼻腔陰影が発見されることは、耳鼻咽喉科領域の日常臨床において、

しばしば経験することである。また近年では、脳神経疾患の精査を目的としてMRIが撮影され、副鼻腔陰影が見い出されることも稀ではない。こうした無症候性副鼻腔病変の病態については不明な点が多く、正確な発症頻度や粘膜病変の性状についても、未だ明らかにされていない。そこで副鼻腔疾患以外の診断でMRIが施行された症例を対象として、無症候性副鼻腔炎の発症頻度を中心に検討を行った。

〔対象〕

頭蓋内病変が疑われ、MRIを施行された325例（男性106例、女性219例、平均年齢60.7歳）を対象とした。鼻副鼻腔手術歴のあるもの、耳鼻科で治療中のものは対象から除外した。

〔結果〕

これらの症例に対して、鼻症状（鼻漏、鼻閉、後鼻漏、くしゃみ、頭痛）の有無について問診したところ、鼻症状が無かったものは、257例/325例（79.1%）、何らかの鼻症状を認めたものは78例/325例（20.1%）であった。そこでそのMRI所見を比較すると、鼻症状のない257例中107例（41.6%）、症状を伴うもの68例中46例（67.6%）に副鼻腔に何らかの所見が認められ、両群間に有意差を認めた（ $P<.01$ ）。また年齢についてみると、50歳以下では22例/62例（35.5%）に、50歳以上では131例/263例（49.8%）に副鼻腔病変が存在し、50歳以上で有意に病変を多く認めた（ $P<.05$ ）。

鼻症状が無かった257例についてその病変部位を見ると、上顎洞に99例（38.5%）、篩骨洞には52例（20.2%）で何らかの病変があり、上顎洞では篩骨洞に比べて病変が多く認められた（ $P<.01$ ）。また、最も多く認められた異常所見は粘膜肥厚で74例（28.8%）に見られ、貯留液が26例（10.5%）、ポリープが9例（3.5%）に見られたのに比べて有意に多かった（ $P<.01$ ）。さらに上顎洞について、病変の種類を左右を別々に集計すると、粘膜肥厚が最も多く514側中120側（23.3%）で、貯留液28例（5.4%）、ポリープ9例（1.8%）に比べて有意に多かった（ $P<.01$ ）。篩骨洞についても、粘膜肥厚は43例（16.7%）に見られ、貯留液の9例（3.5%）に対して有意に多かった（ $P<.01$ ）。

〔考察〕

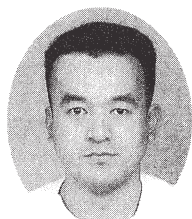
無症候性副鼻腔炎についての臨床的検討は、これまでも単純X線写真、超音波、X線CT、MRIによって行われ、その発症頻度は、16%～45.5%と報告されている。我々の結果でも41.6%に無症候性副鼻腔炎が認められ、その頻度は比較的多いことが示された。MRIを用いた報告もあるが、粘膜病変の詳細な検討はなされていない。MRIは、軟部組織の解像度や、貯留液の検出に優れており、副鼻腔内の微細な変化を捉えることができる。特にT2強調像により、わずかな粘膜肥厚や少量の貯留液の存在も見い出さう。本研究では、こうしたMRIの特性を生かし検討を行ったところ、無症候性副鼻腔炎では、貯留液よりむしろ粘膜肥厚を示すものが多く、したがって鼻漏などの症状を認めないと推測された。また本症が、50才以上で多いことから、加齢に伴う粘膜の変化が原因の一つと考えられた。

（Archives of Otolaryngology-Head and Neck Surgery 123: 602-604. 1997年 掲載）

XI. 医局通信

1. 新入医局員紹介

積山幸祐



自己紹介：麻酔3年もしてなぜ耳鼻科に入局したの？ よく聞かれますが、簡単に申しますと疾患も手術もバラエティに富み，一生興味を持ってやっていけるのではないかと思ったからです。耳鼻科に決めるまでは，いろいろ迷い，葛藤がありました。耳鼻科に決めたからには一所懸命がんばっていこうと思っています。現在市立病院耳鼻科で研修中です。早く手術，手技を覚え，一人前の耳鼻咽喉科・頭頸部外科医に成りたいと思っています。御指導，御鞭撻のほど宜しく願い申し上げます。

2. 医局人事（平成12年4月現在）

| | |
|---------|--|
| 教 授 | 黒野祐一 |
| 講 師 | 松根彰志 |
| 助 手 | 河野もと子，西園浩文，牛飼雅人（歯学部口腔生理） 宮之原郁代，鮫島篤史，出口浩二，西元謙吾 |
| 医 員 | 林 多聞，吉福孝介 |
| 大学 院 生 | 福山 聡（大阪大学微生物病研究所免疫化学分野） 高木 実 |
| 部外研究生 | 岩元光明 |
| 研修登録医 | 福岩達哉 |
| 医 局 長 | 松根彰志 |
| 病 棟 医 長 | 西園浩文 |
| 外 来 医 長 | 宮之原郁代 |

関連人事（平成12年4月現在）

| | |
|---------------------|------------|
| 国立南九州中央病院（副院長：勝田兼司） | 松崎 勉，濱崎喜與志 |
| 国立療養所星塚敬愛園 | 岩下睦郎 |
| 県立大島病院 | 松永信也，杉原純次 |
| 県立鹿屋病院 | 花田武浩，森園健介 |
| 県立北薩病院 | 上野員義，大城 浩 |
| 鹿児島市立病院（部長：鹿島直子） | 積山幸祐 |
| 出水市立病院 | 平瀬博之，関 大八郎 |
| 済生会川内病院 | 島 哲也，岩坪哲治 |
| かごしま生協病院 | 江川雅彦，相良ゆかり |
| 藤元早鈴病院 | 福島泰裕 |
| 天 辰 病 院 | 新納えり子 |
| 今 村 病 院 分 院 | 宮之原利男 |

3. 学会報告

第17回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会

高 木 実

第17回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会は、去る平成11年3月24日から26日まで3日間の日程で、宇都宮市にて行われました。当科からは黒野教授、松根先生、宮之原郁代先生、宮之原利男先生、私高木が参加させていただきました。

サテライトシンポジウム5題、シンポジウム5題、推薦講演3題、一般演題94題と多くの免疫アレルギーに関する講演があり内容の濃い学会でした。学会参加者全員が免疫アレルギーに精通しており、私が講演を聞いていても、さっぱり解らないことばかりで、自分の勉強不足を痛感しました。

アフター5は黒野教授を筆頭にうまい餃子を探しに夜の街にくり出し、夜の宇都宮も堪能することができ、いろいろな意味で学会を楽しむことができました。

第18回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会は、平成12年3月24日より石川県金沢市で行われます。今回は今回以上に熱のこもった討論が行われ、素晴らしい学会になることと思います。

第49回日本アレルギー学会

西 元 謙 吾

今回、幸運にも広島県の広島国際会議場で開催された日本アレルギー学会に初めて出席する機会を与えられました。会場は、平和記念公園に隣設されていて、修学旅行の学生がわんさかいました。参加者が私一人で少し寂しい気もしましたが、到着早々公園内を散策したり、原爆ドームを見学したりしてリフレッシュしました。

私の発表が好酸球の発表であったことや、現在進行している実験がサイトカインに関するものであったことから、それらの領域に関する発表を聞くことに専念しました。他科の先生方の研究を聞くと、我々が苦勞している技術が簡単に行われているような錯覚

をうけるほど、多種多様な研究成果が飛び交っていました。現在担当している、FACS-can を早く完全に自分のものとしなくてはいけないと改めて思い知らされました。私は、「鼻アレルギー粘膜における Thymidine Phosphorylase の分布」という題目で発表を行いました。この学会全体の傾向でしたが、質疑応答がかなり活発で、質問に対する回答に一苦労でした。

また、学会中に花粉症研究会にも参加させていただきました。耳鼻咽喉科医のみでなく、植物の研究者や、気象の専門家などから色々な方面の意見が交換されました。恥ずかしながら、初めて知るようなことが多く、非常に面白い研究会でした。

さてアフター5ですが、1日目は、なにぶん一人ではそんなに飲み歩いてもおもしろくないので、とりあえず広島で有名な好み焼き、穴子飯、尾道ラーメン等を食べ歩きました。2日目は、少し遠くまで行こうと思い立ち、路面電車で宮島まで行きました。到着したときにはすでに陽が落ちていて、真暗な海の上を走るフェリー、暗闇からいきなり出てくる鹿、台風でこわれた栈橋などが印象に残り、実際の厳島神社などはあまり見学できませんでした。しかしこのようなシュールな旅もたまには良いかなと思いつつ、広島を後にしました。

第6回マクロライド新作用研究会

第12回日本口腔咽頭科学会

宮之原 利 男

平成11年7月9、10日、東京にてマクロライド新作用研究会が開催された。呼吸器内科が中心となり、耳鼻咽喉科、皮膚科などが加わった研究会であるが、当研究会が毎年発行している記録集は幅広い視点からマクロライドの薬理作用についての研究報告が掲載され興味深い内容であった。培養細胞に対するマクロライドの影響を遺伝子レベルで解析することが自分の研究課題であったため、この記録集は各大学のマクロライド研究の進行度を知り、また研究方法・条件を決める上で非常に参考になった。今回、目標とした研究会へ自らの研究成果を携えて参加できたことは感慨深いものであった。今年の研究会開催の辞では、マクロライドの研究を基礎から再び臨床効果の判定へ戻すよう厚

生省より要請があり学会の方向性を少し変えなくてはならないという趣旨が提言された。マクロライドの臨床効果は世界的にみるとまだまだ認知されていないようで、これまでの報告に加え、さらなる臨床データを必要としているようだ。学会内容であるが、初日は主にマクロライドの分泌抑制に関する研究でイオンチャンネルに及ぼすマクロライドの影響について多数報告がなされた。2日目は臨床データやサイトカイン抑制、転写因子に関する報告がなされた。研究会が始まって以来、飛躍的にマクロライドの基礎研究が進んでおり、今後も研究会の成果が期待できると思う。

平成11年10月28～30日、仙台にて口腔咽頭学会が開催されたが、この学会には諸事情にて不本意ながら短時間の滞在となってしまった。初日の口腔・咽頭ビデオ手術手技検討会など特に参加したかったが、その日はまだ鹿児島で外来診察を行っていた。翌日仙台に向かい昼過ぎからの参加となった。第3日目の午前中に学会を後にしたが、この日のシンポジウムである「咀嚼と嚥下の基礎と臨床」では各大学の嚥下のリハビリ方法が参考になった。また薬物治療による嚥下の改善などの報告もあった。初日から参加できたらもう少し勉強になったのではと悔やまれた。

第100回日本耳鼻咽喉科学会総会

宮之原 郁 代

平成11年の日本耳鼻咽喉科学会総会は、5月20日～5月22日の日程で、仙台市で開催されました。医局から、黒野教授を始め牛飼先生、西園先生、平瀬先生とともに参加しました。

宿題報告が、液体力学の面から見た発声障害、限局性血管条障害に関する研究の2題、シンポジウムが、基礎耳科学からみた内耳難聴—治療への示唆を中心に—、国際シンポジウムが、新世紀における耳鼻咽喉科学—欧米からの視点—、さらに記念講演、パネルディスカッション、臨床セミナー、ミーティングエキスパート、そして一般演題514題という盛りだくさんの構成となっていました。

ミーティングエキスパートは、今日多くの関連する学会が、発展充実してきているにもかかわらず、会員がすべての学会に参加することは、不可能であることを鑑みて、最近の

トピックスを吸収するチャンスとして設定されたとのことで、興味深く聴講しました。

また、今回はとくに第100回ということで記念誌を頂きましたが、第1回の会が、1897年（明治30年）に開催され、以後中断もありながらも今回の第100回迎えた経緯をひもとくにつれその歴史の重さに感銘することでした。

さて、仙台といえば、笹蒲鉾、牛タン、など有名です。これらは、おみやげに持ち帰りずいぶんと喜ばれました。

また、西園先生おすすめの、「この店の牡蠣は絶対大丈夫（あたらない）」という、〇〇徳の生牡蠣、（本当は、Rのない月の牡蠣は、邪道でしょうけれど）また、Mずしの、海の幸、オリジナルの日本酒など、とてもおいしく頂いてまいりました。

第61回耳鼻咽喉科臨床学会

岩 坪 哲 治

第61回耳鼻咽喉科臨床学会が大分県別府市で6月25日、26日の2日間にわたり行われました。鹿大耳鼻科からは松根先生がシンポジウムで「YAMIK カテーテルと副鼻腔感染症の診断・治療」の演題で講演され、河野先生が「眼症状をともなう副鼻腔炎症例の検討」、西元先生が「外鼻部悪性腫瘍の再建例4症例」、岩坪が「小児耳下腺結核の1症例」での発表を行いました。

私自身全国規模の学会に初めて参加させていただきましたが、その会場の多さと人の数にびっくりし、「耳鼻科医ってこんなにいるんだ。」と変に関心してしまいました。鹿大の先生方の発表以外の時間には自分が興味のある会場に足を運んだりして楽しい一時を過ごさせて頂きました。学会の後の懇親会では大分名物の関サバのコーナーが設けられていましたが懇親会開始直後より瞬きする間もなく人だかりができ、自分が行ったときにはすでに切れ端くらいしか残っていないといった状況でした。

それはさておき、やはり大きな学会ともなると講演内容も多岐にわたり、いろんな会場に足を運んでみたくなりましたが時間の関係上無理なことが良くわかりました。今回は自分の発表の準備でいっぱいでしたが、次回このような機会があれば前もって聞きに行く演題を決めておくことくらいはしておけばとおもいました。余裕のない私

には無理な気もしますが、何はともあれ大変ためになった学会でした。

第 9 回 日 本 耳 科 学 会 総 会

福 岩 達 哉

平成11年 9 月 9 日から11日の 3 日間、東京の日本都市センターにおいて第 9 回日本耳科学会総会が開催されました。鹿児島大学からの演題は以下の 2 題でした。

1. 「当科における anterior spinotomy 手術症例」

相良ゆかり先生（鹿児島市立病院）

2. 「ペニシリン耐性肺炎球菌を起炎菌とする反復性急性乳様突起炎の一例」

福岩 達哉（鹿児島大学）

私は昨年が続いて 2 回目の参加だったのですが、数多くのビデオ演題と盛んなディスカッションはやはり非常に勉強になりました。特に今回気づいた点としては、遺伝性難聴に関する演題が12題あった点であり、最近のトピックスとしてよく取り上げられている遺伝性難聴への関心の高さを物語っているものと思われました。

昼は学会で勉強させてもらったわけですが、夜は高校時代の友人に誘われて赤坂の四川飯店という中華料理店に繰り出しました。ここは「料理の鉄人」陳健一の店であり、我々が行った際も陳健一さん自らが挨拶に出てきました。コース料理に加えて店自慢のマーボー豆腐を頂きましたが、これがもう絶品で、「非常に御上手ですね」という、料理記者歴45年の岸朝子の名セリフが思わず飛び出してくるほどでした。

四川飯店、じゃなかった、日本耳科学会、来年もぜひ行きたいものです。

第38回日本鼻科学会

大 城 浩

第38回日本鼻科学会は平成11年9月30日～10月2日の3日間にわたり、千葉県幕張メッセで開催されました。当教室からは、黒野教授、松根先生、出口先生と私が参加しました。

シンポジウム2つ（Ⅰ鼻疾患における遺伝的素因の解析とその意義－HLAと分子生物学的アプローチによる最近の知見－、Ⅱ鼻茸の病態とその発症メカニズム）、ランチョンセミナー2つ（Ⅰ花粉症－他科との接点－、Ⅱ解説講座 サイトカイン、接着分子と下気道粘膜病変）と、招待講演は「Allergic rhinitis in Korea」と題して Kyung Hee 大学耳鼻咽喉科の Joong Saeng Cho 教授が講演されました。基礎的な内容の発表は十分理解できませんでしたが、ビデオによる鼻副鼻腔手術や鼻アレルギー手術の演題発表もあり、私にもわかりやすい発表内容の講演が多くあったように思いました。

さて幕張メッセは、皆さんご存じと思いますが国際会議場や東京モーターショーの開かれるイベント会場を持つ施設ですが、幕張自体は高層ビルの立ち並ぶ無機質な都会のイメージでした。会場のすぐ近くにはホテルが立ち並び、また、千葉マリスタジアムも歩いて数分の場所にありました。学会の後マリーンズとライオンズの試合を皆で見に行こうと思ったのですが、時間が遅く球場に入れてもらえず残念な思いをしました。そのかわりホテルのラウンジから双眼鏡で球場内を眺めることが出来、雰囲気を楽しむことが出来ました。

第9回頭頸部外科学会に参加して

吉 福 孝 介

第9回日本頭頸部外科学会は平成10年1月22日～1月23日まで千葉市 HOTEL SUNGARDEN TIBA で開催され、自分にとって最初の学会発表をするべく参加させて頂きました。丁度その頃は、大島郡医師会病院に出向しておりましたので、奄美大島か

らの参加となりました。学会で発表する様に教授より言われたのは、平成9年の10月頃であったと思います。学会で発表する為には、当然の事ではありますが、発表原稿・スライド作成をしなくてはなりません。自分はパソコンすら持っていなかった為、頭の痛い想いをしましたが、即パソコンを購入の上、西園先生をはじめ医局の各先生方に色々ご指導頂き、なんとか作成をする事ができました。自分なりに「これでOk」と予演会に望みましたが、玉砕されてしまいました。

その後なんとか準備も整い、鹿児島空港から Big Bired へと向かいました。到着する際に飛行機の窓より関東の夜景が見えた時、自分は千葉県出身である為、約半年振りを見る夜景を懐かしく思いました。また、本学会が千葉で開催される為に、黒野教授は自分のような若輩者に参加権を与えて下さった親心に深く感謝致しました。

学会場に到着し、まず、人の多さや規模の大きさにビックリ致しました。自分は2日目第1群の発表（鼻咽腔血管線維腫に対する手術療法の検討）で前夜から寝つけずとても緊張しました。発表の際は大勢を前にして足が宙に浮いたような状態でなんとか終えました。特に発表後の質疑応答の時間は、「質問は、止めて欲しいなあ お願い！」と生きた心地がしませんでした。すると思いは裏腹に質問がありましたが、松崎先生に一つだけ調べて置くように言われた内容に関する事で、すかさず返答する（カンニングペーパーを読んだだけですが）事が出来ました。この時程、普段厳しい松崎先生の御指導に対して感謝を覚えた事はありませんでした。学会の休憩時には、平瀬先生と coffee break した事を覚えております。現在自分は、出水市立病院で平瀬先生と仕事を御一緒させて頂いているのは、coffee の結んだ舎弟愛でありますのでしょうか？ 最後に、スライド作成をするにあたり、親切にもスライドをお貸し頂いた徳重栄一郎先生、また、この発表および論文作成をするにあたり、御指導頂いた黒野教授及び西園先生を始めとする諸先生方にこの場をお借りして感謝させて頂きたいと思います。

第23回 日本頭頸部腫瘍学会

関 大八郎

平成11年6月16日から18日まで東京ベイホテル東急にて第23回頭頸部腫瘍学会が開催

されました。バイホテルの場所は千葉浦安のディズニーランドの隣というディズニープーンにはたまらない場所でしたが、宿泊場所と遠く30代のむさい男としたはあまりメリットはありませんでした。学術内容はといいますと約350題の演題を中心として、シンポジウム2題、「頭頸部がん新 TMN 分類の問題点」「頭頸部再建における形成再建手技の進歩」、パネルディスカッション2題「頭頸部がん放射線治療の変遷と21世紀への展望」「上顎がん治療の選択と長期成績」、ランチョンセミナー4題「Medical Oncologist から見た頭頸部腫瘍の化学療法」「頭頸部再建材料」「がんによる痛みへのアプローチ」「体表面の縫合」と盛りだくさんでした。特にシンポジウムやランチョンセミナーでは現場の臨床にすぐにでもフィードバックされるような内容であり大変ためになりました。出発が遅かったこともあり、ビデオシンポジウムを見れなかったことが残念でした。

アフターファイブは学会場がディズニーランドの近くということもあり、特に出歩くというわけでもなく、おとなしく過ごしました。

第4回扁桃とアデノイドに関する 国際シンポジウム in ベルギー

河野もと子

私は、昨年(1999)11月2日から5日までベルギー、アントワープにて開催された第4回扁桃とアデノイドに関する国際シンポジウムに、黒野教授とともに出席しました。

黒野教授は Keratin-specific immune response of tonsil. (扁桃のケラチンに対する特異的免疫反応) と題して、扁桃の単核細胞は皮膚の一成分であるケラチンに対する特異的免疫反応を有し、特に掌蹠膿疱症患者の扁桃ではその反応が亢進している。という主旨の発表をされました(詳しくは口腔咽頭科12巻1号の第12回日本口腔咽頭科学会総会、扁桃シンポジウムの抄録を参照)。この発表についてノルウエーの扁桃研究の大家である Professor Brandtzeag が大変興味を示され、示唆に富むコメントを述べられました。

私は Cytokine production of CD14-positive cells in palatine tonsils. Comparison with monocytes in peripheral blood. (口蓋扁桃の CD14 陽性細胞のサイト

カイン産生能、末梢血単球との比較)と題して、口蓋扁桃のCD14陽性細胞はインフルエンザ菌のLPS(Lipopolysaccharide)刺激に対するサイトカイン産生反応が末梢血単球に比べて有意に低く、LPSに対するトレランスが存在するのではないか、という主旨の発表を行いました。私の発表についてもProfessor Brandtzeagより検討すべき課題をコメントいただきました。

本シンポジウムでは、扁桃とアデノイドに関する基礎的研究から臨床研究まで幅広く取り上げられ、全106演題のうち30演題が招待講演であり、各方面でトップレベルの研究者の最新の研究成果を知ることができました。一般演題は58題、ポスター演題は28題で、討論の時間も充分とられオープンな雰囲気でも討論がなされました。最近の免疫学の進歩に伴い扁桃とアデノイドについても各構成細胞が各種表面抗原によってさらに細かく分類され、その機能や生理的意義について研究が進んできており、また、各種接着分子や産生するサイトカイン、さらに上皮細胞や血管内皮細胞等他の細胞との相互作用について研究されてきています。私のような扁桃研究のビギナーは免疫学をもっとしっかり勉強する必要性を痛感しました。そして最新のデータをふまえて今回の研究も単球/マクロファージ系細胞と他の構成細胞との相互作用という面からもさらに発展させていくべきと感じました。一方IgA腎症や掌蹠膿疱症など病巣感染として口蓋扁桃との関連がわが国ではほぼ確立した概念ですが、欧米では臨床家に十分認識されていないことが本シンポジウムで言われていました。日本で最も盛んに研究されているこの分野は、そのメカニズムを明らかにすることによって全世界にその認識の必要性を知らしめていくことができるものと思われました。本シンポジウムに参加し貴重な経験をさせていただいたと思います。

さて、ベルギーでは学会の合間に観光も多少しました。学会のあったゲントは歴史の古い町で中世から残っている石造りの大きな建物や教会、石畳の狭い道路など重々しく大変趣きがありました。黒野教授とふたり旅とはどんなだったろうと興味深深(あるいは心配?)のかたもいるかもしれません。実は私も学会準備がなかなか終わらずぎりぎりまで教授に見ていただくなどお手をわずらわせてしまい、ご機嫌を損ねて気まずい旅になるのではないかと心配していました。しかし黒野先生は私に結構気を使ってくださって、ベルギー観光について予習不足だった私をご自分の行ったことのある名所・観光スポットへ連れて行ってくださったり、いくつかの講演をパスして観光するのを許していただいたりしました。黒野先生自身、観光は結構好きだとおっしゃっていました。また、

旅のあいだ先生の学生時代の思い出話やノイヘレン時代の苦労話を聞いて日頃こわい教授にしばし親しみを感じました。

医局員のみなさん、がんばって国際学会にどんどん行きましょう。そして黒野先生よりたくさん観光の予習をして、〇〇はすごいそうですよ、◇◇はぜひ見ておくべきだそうですよ、などと教授をそそのかして観光にひっぱりこむのもよいのではないのでしょうか。

4. 関連病院便り

国立南九州中央病院便り

松崎 勉・濱崎喜與志

南中に赴任しあっというまに3ヶ月が過ぎ、少し病院にもなれてきたかなという感じです。赴任当時は今、自分がどこにいて何をしているか分からない状態で、勝田先生、松崎先生に迷惑ばかりかけていました。(今もあんまり変わっていないといううわさですが……)

南中に赴任された先生方に手術の量、質とも充実しているからすごく勉強になるよと言われましたが、想像以上の量、質で一人で手術しているときは、よく手術室より勝田先生、松崎先生へSOSを発信しています。

最近では再建手術を必要とする悪性疾患の症例も多く、大学より応援をいただきながら手術しています。

また、南中は、他科を含めた他病院よりの紹介患者がとても多いのも特徴のひとつで、勝田先生、松崎先生の“かお”で患者さんが集まっている感じです。

また、この病院は本年7月で、循環器病センター・地域癌センター(だったかな…?)にかわるのですが、予算等の関係でしょうか、現在は特に病院等の改築、増築等の目立った動きはないようです。

さて、現在僕は病院敷地内の官舎にすんでいます。天文館まで徒歩10分と言う絶好のロケーションにありながら、4DK家賃は約17,000円と格安です。難をいえばちょっと古いのですが……。でも通勤5分と言うのはたまらない魅力です。

この絶好の環境で、勝田先生、松崎先生のもと研修を行っています。

(文責：濱崎)

県立大島病院便り

松永 信也・杉原 純次

県立大島病院は15診療科、医師41名、職員375名の県下屈指の総合病院で奄美群島の中核医療機関です。平成12年で創立100周年を迎え11月3日から2日間にわたり記念式典、祝賀行事を行う予定です。京セラの稲盛和夫名誉会長の記念講演、県立病院学会等の予定されています。

近年奄美大島に3つの徳洲会 Hp、医療生協 Hp が開業した影響か当院の患者数が外来、入院共に減少しています。当然収益も減少しており前年度比で4億円近い減少でまさに危機的状況の様です。経営改善会議なるものが3か月おきに開かれ部長の松永先生が嫌々ながら参加しています。

ところで、私（杉原）が奄美に赴任し早4か月となりました。徳之島出身の私は大島も徳之島と同じで車は錆びやすいし大した車は走っていないだろうと考え、金5万円也の軽ワゴン車を知人より購入し荷物を積み込み貨物船で引っ越しを執行致しました。大島に着いてまずびっくりしたのが、名瀬市内を走ってみると、意外とすばらしい車がたくさん走っている事で、私は日々恥しい思いをしています。屋仁川（名瀬市の飲屋街）も店が多く、自他共に認める大酒家の私は水（酒？）を得た魚の様です。奄美に来て最初の頃は星取り表（飲みに行った日は白星）なるものをつけていて圧倒的に勝ち越していたのですが、最近黒星つづきです。鹿児島に帰るまでには勝ち越せる様に頑張りたいと思います。

県立大島病院の大きな特徴の一つは歴代の病院便りでも紹介されているように巡回診療だと思います。年に10回（ほぼ毎月一回）眼科、皮膚科等と合同で奄美群島内の各町を1泊2日 or 2泊3日の日程で巡回します。各科看護婦1名と、事務職2名、薬局1名の Team です。器材持ち込みで会場は公民館等です。最初は馬小屋と見間違った保育園廃屋の事もありました。裸電球の下でも診察ができるんだと変に感心致しました。夜は皆で食事に行きそのまま宴会になる事もしばしばです。旅費はでますが、本当に旅費だけで宴会をすと足がでてしまいます。赴任以来、与路島、請島、徳之島、喜界島を巡回しました。与路島は徳洲会の commercial に出てくる離島の中の離島で、診療の最初の患者が裸足だったので、「この島は山羊も牛も人も皆裸足なのか」と逆 culture

shock を受けかけましたが、2人目からは裸足でなかったので、少しがっかりしました。通常疾患が主で中でも老人性難聴、耳鳴り、咽喉頭異常感症が多いですが、請島では逆生菌を見つけ県立病院で手術となりました。これからも地域に根ざした医療を続けて行きたいと思う今日この頃です。

(文責：杉原)

県立北薩病院だより

上野 員義・岩下 睦郎

今、北薩病院にてブームになっているのはマラソンである。火付け役は、当科の上野先生で昨年指宿の菜の花マラソンに参加され、今年もエントリー予定であることを医局で話されていると、内科のドクターも参加していたことがわかり、二人で沿道の声援がすごく参加者の数の多さに圧倒されることや、給水所のさつまいもや豚汁が美味しいこと、また、何よりもフルマラソンを完走したという達成感が何とも言えないと話をしていると脳外科部長、放射線科部長が話に乗りその輪が看護婦さんや技師さんまでひろがり20人の「北薩病院マラソン同好会」が結成され、1月9日の菜の花マラソンにエントリーした。

みんなそれぞれの体力に合わせて練習を重ね、「ランナーズ」や「ターザン」を調べて服装やシューズ・トレーニング方法を研究し互いに情報交換を行った。このマラソン熱の情報は院長先生の耳にも入り「北薩病院」のロゴの入ったTシャツがポケットマネーから全員に贈られ、決起集会も行われ本番当日を迎えた。当日はあい憎の小雨交じりの天候ではあったが気温がさほど低くなく、受け持ち患者の状態の悪いドクター以外はスタートを迎えた。院長先生も応援に駆けつけ9:00スタート。二人の看護婦さん以外は無事完走した。

成人式の休日をあげ医局に現れたマラソン参加者は、ちょっと足をひきずりながら大変満足そうで自分のタイムが記された証明書を見せ合いながら、レースを振り返り次回目標タイムを決めたりしていた。上野先生も目標タイムをクリアし嬉しそうだった。

次のレースは桜島ハーフマラソンに決まり、また、練習が始まったようである。私自

身は青い芝生の上を球を打ちながらランニングしようと思っている。

(文責：岩下)

県立鹿屋病院 便り

花田 武浩・関 大八郎

部長として着任以来3年目を迎えました。本年1年間も、二人規模の出張病院としては充実した一年間を送ることができました。1999年1月から12月までの一年間に本院で行った手術症例は303例で、全麻症例が大半の276例を占めています。表に保険請求点数に準じた1年間の手術概要をかかげます。無理な手術予定にかかわらず対応して下さる当院麻酔科鶴丸部長、三上先生にこの場を借りて御礼申し上げます。

1999年1月～12月 手術内容

| | | | | |
|-----------|--------------------|----|--------------------|----|
| 耳 | 鼓膜チュービング | 13 | 鼓室形成術 | 11 |
| | 外耳道異物除去 | 2 | 中耳根本術, 耳介形成術 | 各1 |
| 鼻 副 鼻 腔 | 内視鏡下鼻内篩骨洞手術 | 20 | 内視鏡下鼻内上顎洞開窓術 | 13 |
| | 鼻中隔矯正術 | 16 | 下鼻甲介切除術 | 18 |
| | 上顎洞根本術 | 4 | 上し根本術 | 7 |
| | POWZ (内視鏡下操作も含む) | 18 | 異物摘出 | 4 |
| | 鼻副鼻腔悪性腫瘍切除 | 2 | 鼻骨骨折整復術 | 2 |
| | ブローアウト骨折整復 | 1 | 鼻前庭嚢胞摘出, 鼻副鼻腔腫瘍摘出 | 各1 |
| 喉 頭 | MLS | 43 | thyroplasty | 1 |
| | 喉頭全摘 | 3 | | |
| 口腔・咽頭・唾液腺 | 扁桃摘 | 68 | アデノイド切除 | 12 |
| | 扁桃切 | 4 | ガマ腫摘出 | 3 |
| | 唾石 (ステノン管内) | 1 | 舌悪性腫瘍亜全摘 | 2 |
| | 切除 | 3 | 顎舌腺摘出 | 2 |
| | 耳下腺腫瘍摘出 | 5 | 頬粘膜悪性腫瘍切除+遊離前腕皮弁再建 | 1 |
| | 下咽頭悪性腫瘍(咽喉食摘)+遊離空腸 | 1 | 口蓋腫瘍摘出 | 1 |
| | 下顎骨折整復 | 1 | UPPP | 2 |
| | 中咽頭悪性腫瘍手術 | 3 | | |
| 頸部・食道・気管 | 甲状腺全摘 (亜全摘) | 7 | 甲状腺葉峡切除 | 11 |
| | 気管切開 | 3 | 食道異物摘出 | 1 |
| | 頸部郭清 | 12 | 外頸動脈結紮 | 1 |
| | 気管口狭窄拡大 | 1 | 正中頸嚢胞摘出 | 1 |

さて、県立鹿屋病院耳鼻科の二人にとっては、本年は各種の試験勉強に忙しい一年でした。関先生は、7月に耳鼻咽喉科専門医試験を受け、無事合格する事ができました。また、私は6月、7月にそれぞれ英検の準1級試験、一次・二次試験に合格することができ準1級の資格を得ることができました。現在、1月のアレルギー学会認定医試験に向け勉強中です。さらに、2000年中の英検1級合格を目指し準備中です。将来的に通訳資格を取得したいと考えています（携帯型小型翻訳機の普及で通訳が必要なくなるかも？）。

本院も、2000年中には新病院へ移転します。ハードは新しくなりますが、ソフト面では旧態依然の感が否めず、鹿児島県の地域医療に対する取り組みが、もっと長期的展望に立ち執り行われることを切望しています。

（文責：花田）

鹿児島市立病院便り

相良 ゆかり

はやいもので、鹿児島市立病院に研修でお世話になるようになってから、はや1年9ヶ月が過ぎようとしています……。

麻酔研修でもお世話になっている病院であるだけに、耳鼻科がどれ程忙しいか、よく解っていたので、最初は両肩に岩が乗っているのではないかと思う位、肩は落ち、目の前が真っ暗になる程のプレッシャーを感じていました。もちろん、思っていた通り重症の患者さんが次から次へと入院してくる病院で、目が白黒なる毎日ではありました。

しかし、そのうちに、この忙しさが“やみつき”になり、鹿島先生、花牟礼先生、笠野先生にくっついて、ちよろちよろ歩き回られずにはいられなくなっていました。（ただ、くっついて歩き回っていた感がつよいですが。）1年が経とうとした時、市立病院残留の言づてを受けて、大喜びしたことも思い出されます。

市立病院は研修病院として臨床経験を積むためには非常に勉強になる病院です。Ope件数も多く、症例の種類も豊富です。仕事はハードではありますが、それでも楽しくできるのは病棟・外来の看護婦さんをはじめ、各科の先生方、スタッフの方との連携プレーがすばらしいものだからだと思います。

次に研修に来られる先生も、市立病院での研修は医師人生の宝になると思います。どうぞ頑張ってください。

最後に、鹿島先生、花牟礼先生、笠野先生、約2年間、御指導いただき本当に有り難うございました。

H11. 4月～H11.12月までの手術件数 合計359件

大まかな内訳として

| | | | |
|---------------|-----|-------------------------|-----|
| • 耳：鼓室形成術 | 73例 | • 頸部：頸部悪性腫瘍として再建術を行ったもの | |
| 鼓膜形成術 | 7例 | 中咽頭 | 8例 |
| 先天性耳ろう孔 | 4例 | 下咽喉 | 7例 |
| 聴神経腫瘍摘出術 | 1例 | 喉頭 | 3例 |
| • 鼻：内視鏡下副鼻腔手術 | 32例 | 甲状腺 悪性腫瘍 | 10例 |
| 上顎悪性腫瘍術 | 3例 | 良性腫瘍 | 11例 |
| 鼻中隔矯正術＋下甲介切除術 | 15例 | 耳下腺 悪性腫瘍 | 3例 |
| | | 良性腫瘍 | 7例 |
| | | MLS | 23例 |
| | | 口蓋扁桃摘出術 | 71例 |
| | | その他 | |

(文責：相良)

LETTER from IZUMI

平瀬 博之・吉福 孝介

みなさん、いかがお過ごしでしょうか？

今年の7月から出水平市立病院にて、仕事をさせて頂いている吉福です。

この病院に来て、まず驚いたのは、家の近さです。近いと言っても適度な近さではなくて本当に近すぎるのです。距離として約10m位なのです。

次にびっくりしたのが、家のテラスに鳩の糞が溜まっていて、さらに物干し竿には、鳩の群れが気持ち良さそうに昼寝をしておりました。(これは、チョット言い過ぎ)。まあ、僕の家を紹介はこれくらいにしておき、病院の紹介及び出水の町についての紹介に

移りたいと思います。

I 出水市立病院について

① 外来診察日は、月～金曜日（木曜日のみ一日）です。最近では、大分慣れて来ましたが来た当初は、外来患者の多さに驚きました。こちらに来てほんの少し慣れてきた7月下旬には丁度、外来の子供患者が夏休みに入り、それに便乗してその親達も診察を受けられた為、外来患者数がより一層多くなり、またまたびっくりしてしまいました。

② 手術日は、水・木曜日で、平均週3件の割合であります。しかし、病院が国道3号線沿いに位置している事と、第1次及び2次救急外来がある事により思った以上に交通外傷が多く週5～6件となる事もあります。

③ そして忘れてはならない救急外来があります。僕は研修医である為、当直はしておりませんが（部長の平瀬先生はあります。一度ご一緒させて頂きましたが、大変そうでした。）驚いたのは、僕の得意とする鼻出血、急性中耳炎（ひどい物は除く）ぐらいでは呼ばれません。呼ばれるとしたら喧嘩・交通事故・酔っ払いによる顔面裂傷、顔面骨折などです。今は大分慣れましたが、最初のうちは、ビックリしてしまい対応に困りました。

II 出水の町について

① 鶴が来ます。（扁摘のミス鶴娘は、そんなに可愛く無かったが、タカビーだった。）

② 寒いです。

③ 出水市民は、マラソンが好きです。（11月下旬に、出水市駅伝大会があり市立病院も登録しますのでドクターチームとして走らなくてはなりません。ちなみに、僕も参加しましたがブービーで（72位）タスキをもらいビリでゴールしました。

出水は漁師町なので口の悪い人もたまにいらっしゃいますが、根はいい人であると思います。

最後に早くこの町に慣れて、部長の技を少しでも多く盗み、立派な耳鼻咽喉科のMan（マン）になりたいと思います。

（文責：吉福）

LETTER from SENDAI

島 哲也・森園 健介

みなさん、いかがお過ごしでしょうか？

今年の4月から済生会川内病院にて、仕事をさせて頂いている森園です。

ここに来て、まず驚いたのは、病院が借りてくれた家の広さです。広いと言っても適度な広さではなくて本当に広すぎるのです。独身者にも関わらず、6畳の部屋が4つもあるのです。

次にびっくりしたのが……ってこれ以上真似するのはちょっと気がひけるので、そろそろ自分の言葉で書こうかと思えます。では、病院の紹介及び川内市の紹介に移りたいと思えます。

I 済生会川内病院について

済生会川内病院は近年立て直して、とてもきれいな病院です。受付・外来とも明るく広々としており、開放感いっぱいです。ナースステーションも広く、仕事がしやすいです。いい病院だなと思っていたら、日経ビジネスという雑誌の「21世紀型良い病院」という特集で、アメニティー部門ランキング全国4位という結果が載っていて、ビックリしました。(なお、このランキングは個室病室の割合や外来の待ち時間などを評価の対象としており、必ずしも僕を感じた病院の印象が評価されたわけではありませんが……。でもスゴイ。)

それから今年は、わが済生会川内病院が担当となって第52回済生会学会が開催されました。これはいったい何なのかと申しますと、全国の済生会病院が持ち回りで主催する学会で、さまざまな講演・シンポジウムなどが行われ、全国各地の済生会の医師・看護婦・職員が参加する、まさに済生会の一大イベントなのです。10月16、17日に鹿児島市民文化ホールで開催されたのですが、そんな一大イベントを主催するだけにその日が近付くにつれて、担当の方々は準備に大忙し。当日も円滑に学会が行われるように職員総出で進行にあたっていました。(僕は下っ端なので特に係にもならず、講演を聞いただけでしたが。)幸い好評のうちに学会も終わり、担当の皆さんもやっと落ち着かれたようです。

II 川内市について

川内市には2つの大きなイベントがあります。川内市花火大会と川内大綱引きです。花火大会の日は済生会が夜間当番の日だったのですが、鳥先生が待機を変わってくださって川内川の河川敷で見ることができました。花火専門の業者によるものもあり、なかなか壮観でした。もう一方の川内大綱引きは今年で400周年だったとか。これはすぐ決着がつくというものではなく、途中で休みを挟みながら、1時間以上も引っ張り合う大変なものです。僕もはじめて引いてみましたが手のひらが非常に痛くなってしまい、翌日の診療は散々でした。

このような環境に恵まれたところで、毎日を過ごさせてもらっております。ここでの経験を今後に生かしていけるよう、残りの日々を悔いなく過ごそうと思います。

(文責：森園)

かごしま生協病院便り

江川 雅彦・土器屋 富美子

生協病院に赴任して早くも丸3年となります。外来、手術はまだ忙しい(開業ラッシュに影響されることなく?)のですが、今回はその他の活動について述べてみます。毎週水曜日午後は病院全体が外来休診で会議中心となります。医局会議、MC (Medical Conferance)、薬剤説明会、治験委員会、院内感染委員会、管理部会、Ope 室会議、AIDS 勉強会、Ns との勉強会、職員健康診断などが一年を通じて週代わりメニューとして実施されています(と、言っても毎週欠かさず出席しているわけでもないのですが)。その水曜午後～夜間の時間を使って今回、以下の如くの経験をする事が出来ました。

① 患者は86歳男性。下咽頭癌にて家族の希望により平成11年2月本人へ癌告知したところ積極的治療を希望されず、ターミナル管理となる。徐々に体調悪化し夏には一日中ベッド上安静の状態が続いていた。しかしどうしても最後に家に帰りたという本人の強い希望により医師、看護婦、家族の一致協力のもとに、日帰り外出を試みた。自分も患者に付き添い、車椅子での自宅への出入り、散歩・墓参りへの誘導、愛犬の相手(?)

などわずかな時間ではあるがいわゆる介護体験をすることが出来たのは貴重でした。

② 顔面神経麻痺の25歳男性の患者。ある日突然意識障害，脱力発作後による握力低下，歩行困難がおり，整形外科にてリハビリ続けるも改善が見られない状態であった。そこで近医の心療内科 Dr に往診に来ていただき事故，借金，恋愛等のもつれより心因反応としての四肢麻痺ヒステリーという診断にて，水曜夜に定期的にカンファを開くことにより徐々に改善の兆しが見られるようになりました。

③ 慎重なる話し合いを重ねた上，ようやくカルテ開示の運びとなり，要旨は以下の如くです。希望する患者本人が申請書を提示後2週間以内に主治医が同席の上，閲覧・説明する。その際，開示基本料金として一律2000円（コピー代は別料金）徴収する。開示が不適切と主治医が判断した場合には最終的にはカルテ開示委員会が判断する。

④ 月一回他科外来（内科以外の外来，すなわち外科，整形外科，眼科，小児科，耳鼻科をまとめてなぜか「他科」外来と当院では呼んでいる）持ち回りで外来班会という外来患者向けの身近な医療の講演を一時間ほど催しています。当科では嗅覚，中耳炎，アレルギー性鼻炎についての話をしました。

⑤ 年一回バザー（今で言うところのフリーマーケット）を開催するため各職員はそれぞれいらなくなった物，未使用な物を提出するのですが自分にとっても粗大ゴミ処分に役だっており古くなったキャディバッグ，ブルゾン等出すのですが，前は実際売られなかったようです。どうやらあまりに物が良すぎて売るのは惜しいと中途段階でピンハネされたようです。

しかし，本年度の最大の出来事はすばり医局内人事だったと思います。紙上では事の顛末はとて書けません，結局今回の真相を知っている者はただの一人も居ない，というのが私の感想です。

（文責：江川）

今村病院分院便り

宮之原 利 男

昨年ようやく論文を終わらせ，当院に赴任してから外来診療中心の日々となった。大学を全く離れることは今回が初めてであるが，未熟ゆえ他施設へ知らず知らずご迷惑

をかけていることに対してお詫びしたいと思う。当院は県庁の構える鴨池新町にあり、錦江湾と桜島を間近に眺めることができる。内科中心の病院の中に当科があり10年の歴史があるのだが、外来患者は増えきれず現在にいたっているようだ。外来の新患は、地域柄近くのオフィスから休憩時間を利用してくる方が多く、逆に高齢者や小児は少ない。この受診年齢層は再診頻度の少なさの一因になっているのかもしれない。もともと外来診療のみであったが、前任者から全身麻酔による手術（主に扁桃摘）が始まり、現在も引き継がせていただいている。近いうち鼻内用内視鏡が導入されるため鼻・副鼻腔手術の症例数を増やさなくてはいけないと考えている。

日常の診療において新たな発見をすることもあり、また処置に少々工夫を入れたりしている。乳幼児の鼻処置には以前から無力感を感じる事が多く、「耳鼻科にいても鼻を少し吸うだけ」という母親の批評を受けることもしばしばある。そこで0歳から3歳児において陰圧を利用した鼻洗浄を始めてみた。この方法では耳管逆流はなく、吸引管だけでは除去しえない上咽頭にたまっている鼻汁も洗浄液とともに排出でき、急性鼻炎のみならず上咽頭の炎症に起因する滲出性中耳炎にも有効な感じである。なによりもささやかながら処置をしたという達成感があつてよい。外来診療を工夫し、少しでも外来患者が増えるようにしたいと思う。

これまで実験室で過ごすことが多かった休日を、現在はスクールに通い他方面の知識を学ぶ時間としている。次のステップに向け、現在の環境で何ができるか見つけ、できることからやっつけていこうと思う。

(文責：宮之原)

藤元早鈴病院便り

福島泰裕

私が藤元早鈴病院耳鼻咽喉科に赴任してから、早いもので3年になります。平成10年度にオーディオメーター・ティンパノメトリー等の機器更新を済ませた関係で、平成11年度は鼻の内視鏡手術用の鉗子類を数本買ってもらった程度で、ハード面の動きはあまりありませんでした。外来数は一日平均50から60程度で割と暇な病院です。もう少しがんばって外来数を増やしたいのですが、耳鼻咽喉科診療施設が都城地区人口12万人（周辺

部を併せても20万人)に対して8施設あることに加え、当院の会計関係の待ち時間の長さ(どんなに空いていても最低1時間)ゆえに困難な状況です。手術件数は年間100症例程度(約7割が副鼻腔内視鏡手術)で、外来数が少ない分をカバーできているため、事務関係者に仲良くしてもらっております。

年に1回の「関連病院便り」ですので、当院の現状を説明しておしまいと云うわけにはいきませんので、今回は藤元早鈴病院の母体である「社団法人八日会」について書きたいと思います。

八日会は現在の理事長である藤元登志郎先生(精神科医師)が設立した社団法人であり、「医療法人」に比べると税制面で優遇されていますが、近年の成長・拡大の様子は私の知る限り医療関係としては他に類を見ません。先代も医師だったとのことですが、「無理してやったことが次々に当たる」と云われる現理事長一代で大きくなったそうです。

藤元病院、藤元早鈴病院、大悟病院、宮崎循環器センター、都南病院を大きな柱として、関連施設の特別老人養護施設が2つに、看護学校と脳神経関係の研究所(動物舎もあるとのこと)があり、従業員は1,900人余り、病床数は約2,000(精神科を含む)という大所帯です。

都城市役所のそばに藤元早鈴病院と藤元病院が並んで建っており100メートルほど離れた所には都南病院が建っているのですが、これらを併せると敷地面積・建物の規模ともに、すぐそばの都城市役所よりも広くて大きく、近所にある小学校と中学校を併せた面積と同じ程度です。

この拡大は年々加速度を増しており、私が赴任した3年前からすると周辺の土地買収により、敷地面積は2倍近くになりました。

この驚異的な成長は、無論現理事長の先見性・経営手腕に基づくものですが、それを支える経営陣とくに経理関係も大きく寄与している様子です。「仕入れにシビアな八日会」として関係機関に恐れられており、薬価差益がほとんど無いと云われる昨今、20%以上は確保しているとのことです。(某薬品会社関係者談)。

病院経営のノウハウ(実際の手法については掲載不可、興味のある向きは直接お問い合わせ下さい)の片鱗とその現状を目の当たりにすることができ、そろそろ開業をと考えている私にとっては学ぶことの多い派遣病院です。

(文責:福島)

天 辰 病 院 便 り

新 納 えり子

天辰病院に着任してすでに3回目の冬を過ごしています。これまで病院便りを書いていなかったのですが、最近の病院の様子を紹介したいと思います。

1. 外科（天辰院長）、眼科（牧内先生、速水先生—共に女医さん—二人で交代にきています）、そして耳鼻咽喉科です。つまり院長以外は皆女医です。

どの科も大学病院と関連を持っており、外科は大学の外科、麻酔科、産婦人科等からの入院患者を受け入れています。眼科は主に網膜剥離などの急を要する手術を大学からの紹介により行っています。また、最近硝子体手術も始めました。耳鼻科は高圧酸素治療や放射線治療を行う患者さんに入院してもらい、大学へ通院してもらっています。このため、大学病院が満床の時は天辰も入院患者が多くなり、大学に空きのある時は天辰も少なくなります。

2. ヘリカル CT

平成11年11月にヘリカル CT がはいました。奇麗な画像が得られ、造影剤の注入速度も設定可能ですので、大学から CT 目的の患者さんも受けています。また毎週火曜日に、放射線科の先生に読影に来てもらっています。

3. 食事がおいしい

天辰から大学へ転院した患者さんが、よく言います。急性喉頭蓋炎や、扁桃周囲膿瘍で食事が摂りにくい人の流動食なども、症状に合わせてこまめに作ってくれ、大変助かっています。

4. 聴力検査のできる看護婦さんが多い

ここに来てびっくりしたのは、多くの看護婦さんが聴力検査のできることです。夜間や休日当番のときも必要に応じて誰かが検査してくれます。

5. 看護婦さんが皆やさしい

入院患者さんの意見です。

6. 外来患者にわがままな子供が多い

大学病院関係の子息も多く、甘やかされた子供が多い、というのは前任のとある先生方の意見です。確かにそんな面もありますが、こどもは多少なりともみんなわがまま

す。でも、驚くほどの可能性を秘めています。大暴れして治療を受けて翌日に、「僕はもうきのうの僕じゃない」と言って上手に治療させてくれる子もいます。こういう子供たちと楽しく過ごすことのできる病院です。

(文責：新納)

大島郡医師会病院便り

豎山俊郎

奄美大島に来て4ヶ月が過ぎました。

寒い冬が鹿児島市を襲っているらしいですね。さすがに雪は降りませんがここも結構寒くて、暖かい冬を過ごせるとして全く暖房を持って来ていなかったで、ちょっと後悔しています。

さて、大島郡医師会病院では耳鼻咽喉科は診察日を火、木曜日に設定しています。基本的に外来診療ですがレーザーを使った外来手術、1～2泊入院手術なども行っています。

また、月に1回づつ喜界島、沖永良部島、徳之島、そして瀬戸内町を巡回し、診療を行っています。大山先生が出張などで診察できないときは不肖私がピンチヒッターとなります。

ではその他の日は何をいているかという、ここは長期入院患者の多い療養型の病院で(45床程は一般病床もあるのですが)、その入院患者の一部を受け持っております。

疾患は主に内科的な分野です。おかげでいつもは他科に回していた患者を他の先生方にいろいろ尋ねながらなんとかこなしているという毎日です。

ここに来なければ対処できなかったことをたくさん見ることが出来ました。将来独立したときにきっと役立つものと思います。

当直はちゃんとまわってくるのですが、いざというときに主治医を呼び出すこともまずなく、当直医が対処するので呼び出すことはまずありません。その分自分が当直のときにちょっと大変ですが……

また、病院のスタッフが実にフレンドリーで働きやすく、大島と本土が近く、陸続き

であったらなあと思ったりもします。あくまで「近く、陸続きであったら」の話ですが。

では、プライベートはといいますと、一人で広いアパートに住んでいるものですから非常に寂しいのですが、自分のホームページを作ったりしてネット仲間を作ってなんとか持ちこたえています。

また、現在は小型船舶1級免許の取得中です。釣りにもこの病院の釣りクラブの連中と同行させてもらっています。来月はダイビングのライセンスカード取得をするつもりです。せつかくですので残された大島生活を満喫したいと思います。また、「姫ハブ」には嘸まれておりません。

(文責：豎山)

XII. 関連病院（平成12年4月現在）

| 病 院 名 | 郵便番号 | 住所（TEL・FAX） | 外来診療曜日 | 手術曜日 |
|------------|----------|---|---|-----------|
| 国立南九州中央病院 | 892-0853 | 鹿児島市城山町8-1 TEL:099-223-1151 FAX:099-226-9246 | 月・水・金 (8:30～11:30) | 月～金 |
| 国立療養所星塚敬愛園 | 893-0041 | 鹿屋市星塚町4204 TEL:0994-49-2500 FAX:0994-49-2542 | 木・金 (8:30～17:00) | |
| 県立大島病院 | 894-0015 | 名瀬市真名津町18-1 TEL:0997-52-3611 FAX:0997-53-9017 | 月～金 (8:30～10:00) | 火・木・金 |
| 県立北薩病院 | 895-2526 | 大口市宮人502-4 TEL:0995-22-8511 FAX:0995-22-6783 | 月～金 (8:30～11:00) | 水・木 |
| 県立鹿屋病院 | 893-0011 | 鹿屋市打馬1-5-10 TEL:0994-42-5101 FAX:0994-44-3944 | 月・火・水・金 (8:30～10:30) | 月の午後 木 |
| 鹿児島市立病院 | 892-8580 | 鹿児島市加治屋町20-17 TEL:099-224-2101 FAX:099-223-3190 | 新患 月・水・金 再診 火・木 (8:30～11:00) | 月・水・金 |
| 出水市立病院 | 899-0131 | 出水市明神町520 TEL:0996-67-1611 FAX:0996-67-1661 | 月～金 (8:30～11:00) 木のみ（再診） (14:00～16:00) | 火・水・金 |

| 病 院 名 | 郵便番号 | 住所 (TEL・FAX) | 外来診療曜日 | 手術曜日 |
|----------|----------|---|---|----------|
| 済生会川内病院 | 895-0074 | 川内市原田町2-46 TEL:0996-23-5221 FAX:0996-23-9797 | 月～土 (8:00～11:00) 月・金のみ(再診) (14:00～16:30) 水の午後 第1・第3 特殊検査 第2・第4 補聴器外来 (14:00～16:30) | 火・木の午後 |
| かごしま生協病院 | 891-0144 | 鹿児島市下福元町83-4 TEL:099-267-1455 FAX:099-260-4783 | 月・火・木・金 (8:30～17:30) 水・土 (8:30～12:30) (新患は30分前まで) | 火・水・木の午前 |
| 今村病院分院 | 890-0064 | 鹿児島市鴨池新町11-23 TEL:099-251-2221 FAX:099-250-6181 | 月・水・木・金 (8:30～17:10) 土 (8:30～11:30) | |
| 藤元早鈴病院 | 885-0055 | 都城市早鈴町17-1 TEL:0986-25-1212 FAX:0986-25-8941 | 月・水・木・金 (9:00～17:00) 火 (9:00～11:00) | 火の午後 |
| 市比野記念病院 | 895-1203 | 薩摩郡樋脇町市比野3079 TEL:0996-38-1200 FAX:0996-38-0715 | 火・木 (14:00～18:00) 土 (9:00～18:00) | |

| 病 院 名 | 郵便番号 | 住所 (TEL・FAX) | 外来診療曜日 | 手術曜日 |
|---------|----------|---|--|------|
| 天辰病院 | 891-0175 | 鹿児島市桜ヶ丘4-1-8 TEL:099-265-3151 FAX:099-265-2560 | 月・水・金 (9:00~18:00) 火 (14:00~18:00) 土 (9:00~13:00) | 火の午前 |
| 垂水中央病院 | 891-2124 | 垂水市錦江町1-140 TEL:0994-32-5211 FAX:0994-32-5722 | 火・木 (13:30~16:00) 土 (8:30~11:30) | |
| 加治木温泉病院 | 899-5241 | 始良郡加治木町木田字 松原添4714 TEL:0995-62-0001 FAX:0995-62-3778 | 月・火・木 (13:30~16:30) 土 (8:30~11:30) | |
| 田上病院 | 891-3198 | 西之表市西之表7463 TEL:09972-2-0960 FAX:09972-2-1313 | 火 (9:00~17:30) 水 夏(14:00~17:00) 冬(14:00~16:20) | |
| 阿久根市民病院 | 899-1611 | 阿久根市赤瀬川4513 TEL:0996-73-1331 FAX:0996-73-3708 | 火・金 (8:30~15:30) | |

| 病 院 名 | 郵便番号 | 住所 (TEL・FAX) | 外来診療曜日 | 手術曜日 |
|---------|----------|---|--|------|
| 鮫島病院 | 891-0406 | 指宿市湯の浜1-11-29 TEL:0993-22-3079 FAX:0993-22-3019 | 火・木 (8:30~17:30) 水(13:30~17:30) 土(8:30~12:00) | |
| 栗生診療所 | 891-4409 | 熊毛郡屋久町栗生1743 TEL:09974-8-2103 FAX:09974-8-2751 | 第1・第3 金(8:00~16:00) 土(8:00~10:00) | |
| えびの市立病院 | 889-4301 | えびの市大字原田3223 TEL:0984-33-1023 FAX:0984-33-5826 | 火・金 (14:00~18:00) | |